

中国横断自動車道尾道松江線建設に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）

川平第1号古墳

常定川平1号遺跡

常定川平2号遺跡

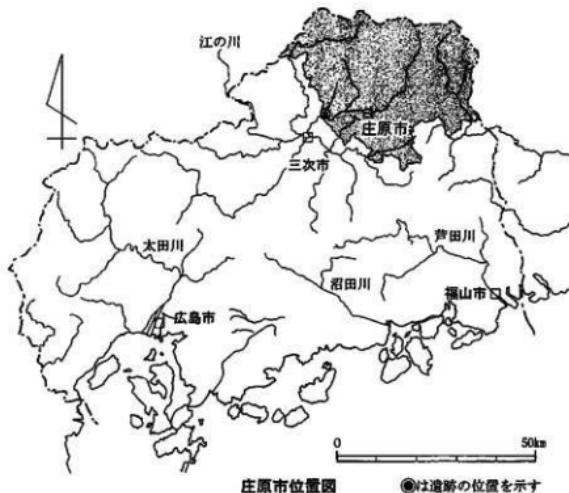
2012

中国横断自動車道尾道松江線建設に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）

川平第1号古墳

常定川平1号遺跡

常定川平2号遺跡



2012

例　言

- 1 本書は平成20（2008）年度に発掘調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡（庄原市口和町常定字川平所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘作業及び出土資料等整理作業は財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室の職員があたり、担当者は次のとおりである。
発掘作業（平成20年度）調査研究員 山田繁樹・新井真吾（現北広島町立豊平南小学校教諭）
整理作業（平成21年度）調査研究員 新井真吾、賃金職員 村田智子
(平成23年度) 調査研究員 曽根 猛、賃金職員 下戸成葉子
- 4 本書の執筆・編集は、曾根が担当した。
- 5 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
S B：竪穴住居跡・掘立柱建物跡 S K：土坑
- 6 土器の断面については、須恵器は黒塗り、その他は白抜きである。
- 7 挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。
- 8 本書に使用した北方位は、旧日本測地系平面直角座標系第Ⅲ座標系北である。
- 9 第2図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図（永田）を使用した。
- 10 本書に掲載した図版の空中写真は株式会社イビソクが撮影した。
- 11 記録類及び出土品は、広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）において保管している。

目 次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(5)
III	調査の概要	(10)
IV	川平第1号古墳	
1	立地と調査前の状況	(12)
2	調査の概要	(13)
3	遺構と遺物	
(1)	墳丘と周溝	(14)
(2)	出土遺物	(15)
4	まとめ	(17)
V	常定川平1号遺跡	
1	立地と調査前の状況	(18)
2	調査の概要	(19)
3	遺構と遺物	
(1)	堅穴住居跡	(20)
(2)	掘立柱建物跡	(28)
4	まとめ	(29)
VI	常定川平2号遺跡	
1	立地と調査前の状況	(30)
2	調査の概要	(31)
3	遺構と遺物	
(1)	土坑	(32)
(2)	出土遺物	(35)
4	まとめ	(35)

挿図目次

第1図 中國横断自動車道尾道松江線路線図	(4)
第2図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)	(7)
第3図 周辺地形図 (1 : 5,000)	(11)

川平第1号古墳

第4図 調査区位置図 (1 : 1,000)	(12)
第5図 調査前地形測量図 (1 : 200)	(13)
第6図 墳丘測量図 (1 : 100)	(14)
第7図 周溝土層断面図 (1 : 50)	(15)
第8図 周溝出土遺物実測図 (1 : 3)	(16)

常定川平1号遺跡

第9図 調査区位置図 (1 : 1,000)	(18)
第10図 道構配置図 (1 : 200)	(19)
第11図 S B 1 実測図 (1 : 60)	(21)
第12図 S B 1 カマド実測図 (1 : 20)	(22)
第13図 S B 1 出土遺物実測図 (1) (1 : 3)	(23)
第14図 S B 1 出土遺物実測図 (2) (1 : 3)	(24)
第15図 S B 1 出土遺物実測図 (3) (1 : 3)	(25)
第16図 S B 1 出土遺物実測図 (4) (1 : 3)	(26)
第17図 S B 1 出土遺物実測図 (5) (1 : 2)	(27)
第18図 S B 2 実測図 (1 : 60)	(28)

常定川平2号遺跡

第19図 調査区位置図 (1 : 1,000)	(30)
第20図 道構配置図 (1 : 250)	(31)
第21図 S K 1・SK 2 実測図 (1 : 30)	(33)
第22図 S K 3・SK 4 実測図 (1 : 30)	(34)
第23図 S K 1 出土遺物実測図 (1 : 3)	(35)

表目次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧表	(2)
第2表	出土遺物観察表	(37)

図版目次

図版1	a 空中写真（南東から）	図版8	a S B 1 カマド断面（南西から）
	b 空中写真（北西から）		b S B 1 完掘（北西から）
図版2	a 川平第1号古墳空中写真 (東から)		c S B 2 完掘（東から）
	b 同左（北から）	図版9	a 常定川平2号遺跡空中写真 (南東から)
	c 調査前全景（北から）		b 同左（南から）
	d 古墳周溝土層（北東から）		c 調査前全景（南西から）
図版3	a 古墳周溝土層（東から）	図版10	d 土坑群検出状況（東から）
	b 同上（南東から）		a S K 1 土層（南東から）
	c 同上（南から）		b 同上完掘（西から）
図版4	a 古墳周溝完掘（北西から）	図版11	c 同上完掘（南東から）
	b 同上（北から）		a S K 2 土層（北西から）
	c 同上（東から）		b 同上完掘（東から）
図版5	a 常定川平1号遺跡空中写真 (北西から)	図版12	c 同上完掘（北西から）
	b 同左（南東から）		a S K 3 土層（北から）
	c 調査前全景（北から）		b 同上完掘（東から）
	d S B 1 検出状況（南西から）	図版13	c 同上完掘（北から）
図版6	a S B 1 土層（東から）		a S K 4 土層（南から）
	b 同上遺物出土状況（北西から）		b 同上完掘（西から）
	c 同上カマド付近遺物出土状況 (北西から)	図版14	c 土坑群全景（北西から）
図版7	a S B 1 カマド付近遺物出土状況 (北西から)	図版15	出土遺物1
	b 同上カマド検出状況（北西から）	図版16	出土遺物2
	c 同上（西から）		出土遺物3

I はじめに

川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡の発掘調査は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本建設事業は、山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と接続することにより中国・四国地方の広域的な交通ネットワークを形成し、瀬戸内海側地域と日本海側地域を結ぶ幹線道路として、輸送時間の短縮、一般道の交通混雑の緩和を図り、この区域の産業・経済・文化の飛躍的発展と沿線地域の生活の向上に大きく寄与しようとするものである。

平成13（2001）年7月から日本道路公団中国支社広島工事事務所（以下「道路公団」という。）は、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と三次JCT～ロ和IC間の文化財等の有無及び取り扱いについて協議を開始した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、平成16年8月23日に、事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を道路公団に回答した。

平成17年10月から中国横断自動車道尾道松江線建設事業は西日本高速道路株式会社に引き継がれ、さらに、平成18年度から当該事業は国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）が事業者となった。県教委は、その後も当該事業地内の試掘調査を実施し、平成20年1月23日に、国土交通省に対して、事業地内で川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡を確認した旨を回答した。この遺跡の取り扱いについて県教委と国土交通省は協議を行い、設計変更等による現状保存は困難であるため、記録保存の発掘調査を行う方向で調整することとした。

国土交通省は、平成20年2月21日付けで県教委あてに埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）を提出し、県教委は同年3月6日付けで国土交通省あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。これを受け、国土交通省は同年3月、財團法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）に調査依頼を行った。教育事業団は、同年3月13日に県教委あてに、文化財保護法第92条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を提出し、同年4月7日に、県教委から発掘調査の指示を受けた。教育事業団は、国土交通省と平成20年4月1日付で委託契約を結ぶとともに、同年4月21日から6月20日までの約2か月間、現地で発掘調査を実施した。

本報告書は、以上のような経緯で実施した発掘調査の成果をまとめたものであり、将来地域の歴史を復元する手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社三次工事事務所、庄原市教育委員会、庄原市役所口和支所、及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

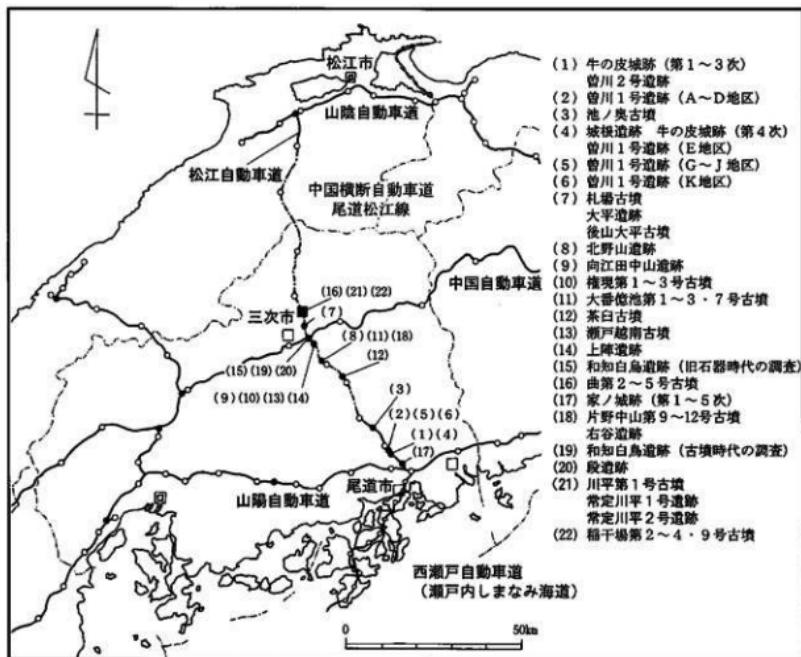
報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	畝状堅堀群 平成15年1月20日～3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭 平成15年7月7日～10月31日			
		第3次	西堅堀 平成15年11月10日～11月28日			
(曾川2号遺跡)				尾道市御調町 大町字西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区 平成14年10月21日～平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一調査区 平成15年4月7日～5月23日			
		C地区	旧・P2第二調査区 平成16年1月6日～2月5日			
		D地区	旧・P1			
(3)	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～10月28日	世羅郡世羅町 字麻戸宇天神	古墳時代後期	古墳
城根遺跡			平成15年1月27日～3月7日	尾道市御調町 大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
(4)	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次	5郭 平成18年1月30日～2月24日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4 平成15年12月1日～12月19日	尾道市御調町 大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3 平成16年6月7日～8月6日	尾道市御調町 大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道 平成17年1月11日～3月4日			
		I地区	旧・P4側道			
		J地区	旧・P2			
(6)	曾川1号遺跡	K地区	平成17年4月11日～7月1日	尾道市御調町 大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
札場古墳			平成17年11月21日～平成18年1月27日	三次市後山町 字札場	古墳時代後期	古墳
(7)	大平遺跡		平成19年6月21日～10月5日	三次市後山町 字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳		平成19年6月21日～10月5日	三次市後山町 字大平	古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡		平成18年7月3日～8月4日	三次市吉舎町 敷地	平安時代	仏教開闢の施設跡
(9)	向江田中山遺跡		平成18年4月17日～6月23日	三次市向江田町 字中山	古墳時代末～古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳		平成17年7月11日～11月11日	三次市向江田町 権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳		平成18年4月17日～8月4日	三次市吉舎町 敷地	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳		平成20年7月7日～9月5日	三次市甲奴町 大字宇質	古墳時代中期	古墳
(13)	瀬戸越南古墳		平成19年6月25日～8月10日	三次市向江田町 字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡		平成19年7月9日～8月31日	三次市向江田町 字上陣	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白島遺跡1(旧石器時代の調査)		平成19年9月25日～12月21日	三次市和知町 字白島	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日～9月21日	庄原市口和町 金田字本谷	古墳時代中期	古墳

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容		
(17)	家ノ城跡	第1次 南東郭群	平成15年9月16日～10月31日	尾道市木之庄町木梨字家城東平	中世	城跡		
		第2次 南東郭群	平成16年5月17日～6月11日					
		第3次 1郭周辺	平成17年10月17日～11月11日					
		第4次 1郭・北尾根	平成18年4月17日～7月21日					
		第5次 1郭・北西尾根	平成19年4月16日～6月15日					
(18)	片野中山第9～12号古墳		平成19年4月25日～8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代中期	古墳		
	右谷遺跡		平成19年4月25日～8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代後期～古代	集落跡		
(19)	和知白鳥遺跡2（古墳時代の調査）		平成18年4月17日～12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾賀町三重	古墳時代中期～古代	集落跡・古墳		
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日～12月15日	三次市四拾賀町段	古墳時代中期～後期	集落跡		
		第2次	平成19年9月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡		
(21) 本巣	川平第1号古墳		平成20年4月21日～6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳		
	常定川平1号遺跡					集落跡		
	常定川平2号遺跡				縄文時代	竪穴		
(22)	稻干場第2～4・9号古墳		平成19年10月9日～12月23日	庄原市口和町大月字稻干場	弥生時代後期～古墳時代後期	集落跡・古墳		

第1表の報告書

- 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 2005年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』 2006年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』 2007年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』 2008年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G～J地区)』 2008年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)』 2008年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』 2009年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』 2010年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1～3号古墳』 2010年
- 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大畠奥池第1～3・7号古墳』 2010年

- (12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (12) 茶臼古墳』 2011年
- (13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (13) 潤戸越南古墳』 2011年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (14) 上陣遺跡』 2011年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (15) 和知白鳥遺跡 1 (旧石器時代の調査)』 2011年
- (16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (16) 曲第 2 ~ 5 号古墳』 2011年
- (17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (17) 家ノ城跡』 2012年
- (18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (18) 片野中山第 9 ~ 12号古墳・右谷遺跡』 2012年
- (19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (19) 和知白鳥遺跡 2 (古墳時代の調査)』 2012年
- (20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (20) 殿遺跡』 2012年
- (21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (21) 川平第 1 号古墳 常定川平 1 号遺跡 常定川平 2 号遺跡』 2012年
- (22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (22) 稲干場第 2 ~ 4・9 号古墳』 2012年



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図 (1) ~ (22) は報告番号

II 位置と環境

川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡は、広島県庄原市口和町常定字川平に所在する。口和町はかつて比婆郡に属していたが、平成17（2005）年に旧庄原市及び比婆郡5町（口和・西城・高野・東城・比和）、甲奴郡1町（総領）が合併し庄原市に含まれている。

庄原市は広島県の北東部に位置し、東には岡山県、北は鳥取県や島根県と接し、西から南にかけては三次市や府中市、南東では神石郡神石高原町と隣接している。位置的に中国山脈の南側にあたり、北に高く南に低い地勢で、市の西部にあたる口和町の北部には釜峯山（788m）、笠尾山（1,019m）、八国見山（845m）、野呂山（844m）などの山々が連なり、ここを源とする藤根川、湯木川が南流し、宮内川と竹地谷川が合流して萩川となり、それぞれ西城川に流れ込んでいる。

口和町内には数多くの遺跡が存在し⁽¹⁾、これまでに常定第1・2号横穴、常定峯双遺跡群⁽²⁾、池津第1号古墳⁽³⁾、金田第2号古墳⁽⁴⁾、金田石谷製鉄遺跡⁽⁵⁾と発掘調査が行われている。また近年では、中國横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って、遺跡の発掘調査例も増加している。⁽⁶⁾

町内の旧石器時代の遺跡としては、向泉地区で平成20（2008）年に調査が行われた向泉川平1号遺跡がある。遺跡は萩川東側の低丘陵上に立地し、遺跡の中・下層で後期旧石器時代の、上層で縄文時代の遺構と遺物が確認されている。下層では後期旧石器時代前半期の遺物集中部7ヶ所と配石5基が確認された。遺物集中部は石器製作の際に生じた剥片、残核が大部分で、少量の石器を伴い、また配石は拳大～乳児頭大の流紋岩の礫数点が数m四方の範囲に分布するもので、これらは一定期間の生活が行われたことを示すものと考えられている。中層からも後期旧石器時代後半期と推定される遺物集中部が1ヶ所確認されている。

縄文時代になると、町内各地で遺物が採集されている。古いものでは、宮内船谷地区で採集された縄文時代後期前半の土器片があり、表面にはヘナタリ条痕が残る。その他、湯木伊与谷では縄文時代後期後半から晩期の土器片および後期の磨製石器が採集され、昭和39（1964）年に行われた湯木の王子塚古墓の発掘調査では縄文時代晩期の凸帯文土器片が採集されている。磨製石器については、宮内船谷地区の宮内川の川床や下金田の湯木川下流の川床からも発見されているが、これらは上流から流れてきた可能性がある。特殊なものとしては、西日本では出土例の少ない独鈷石が口北大月地区から見つかっている。この独鈷石は何らかの儀式に用いられたと考えられる石器で、一緒に出土した土器片から縄文時代晩期と推定されている。⁽⁷⁾ 発掘調査された向泉川平1号遺跡では住居跡は確認されていないが、遺物集中部4ヶ所と集石遺構5基が確認され、縄文時代前期の集落跡と推測されている。遺物集中部には、径6～9mのほぼ梢円形の範囲に、廃棄された土器片や石器、石器製作の際に飛び散った剥片が集中している。また、集石遺構には、拳大～乳児頭大の焼けた流紋岩の礫が数点寄せ集められ、礫の多くが赤く焼けていることから、「石蒸し料理」などに使用された可能性が考えられる。

弥生時代のものとしては、上記の湯木王子塚古墓から採集された弥生時代前期の土器片があり、

口縁直下にヘラ描き沈線が廻っている。これに続く弥生時代中期後半の土器片が湯木の伊与谷や王子塚古墓の付近から採集されている。ともに「塩町式土器」の特徴を持つ壺の一部である。弥生時代後期になると、口北大月地区で平成19(2007)年に発掘調査が行われた稻干場第2~4・9号古墳のうち、第2号古墳の調査区内から竪穴住居跡1軒、土坑3基が検出され、住居跡と土坑1基から弥生後期の壺の口縁部片が出土している。竪穴住居跡は2本柱で、平面形は隅丸方形である。土坑は3基とも平面形が東西方向に長い隅丸長方形で、形状から土坑墓の可能性が高い。

向泉地区で平成20(2008)年に調査が行われた向泉川平2号遺跡では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡1軒が検出されている。この竪穴住居跡は2本柱の円形住居で、住居内から炭化した柱材などが出土しており、焼失したものと考えられる。また、大月地区で平成20(2008)年に調査が行われた原畑遺跡は主として古墳時代前半期の集落遺跡であるが、弥生時代後期と考えられる円形の竪穴住居跡4軒も確認されている。その他にも住居を拡張する過程で平面形が隅丸方形から方形に変化する竪穴住居跡1軒も検出され、弥生時代から古墳時代にかけての住居形態の変遷を示すものと考えられる。

古墳時代になると遺跡数は増加し、古墳をはじめ住居跡や窯跡などの存在が確認されている。住居跡としては、これまでにも常定の峯双遺跡、向泉の空山遺跡、湯木の本郷遺跡などが知られていたが、近年の発掘調査によって、集落遺跡としてまとまった数の住居跡が検出されている。上記の原畑遺跡では、竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡3棟、土坑7基などのほか、隣接する番久遺跡では竪穴住居跡4軒、土坑24基などが確認されている。竪穴住居跡は一部が弥生時代や古墳時代後期に属するものの、多くは古墳時代中期前半に属し、両遺跡は一つの集落を構成していたと考えられる。また、原畑遺跡からは剣形石製模造品が出土しており、この地域では比較的規模の大きな集落であったと考えられる。

古墳は約150基が確認されているが、その大部分は古墳時代後期のもので、萩川流域の常定・大月・向泉地区と、湯木川流域の金田・石谷・永田・湯木地区に集中する傾向を示している。大部分の古墳は円墳であるが、なかに前方後円墳も含まれる。前方後円墳には川西第2号古墳、七塚第7号古墳、金田第4号古墳などがあり、このうち川西第2号古墳はこの地域で最大規模の古墳で、全長23mを有し葺石の存在も想定されている。古墳時代前期の古墳の埋葬施設については、池津第2号古墳、七塚第5・6・8号古墳などが箱式石棺として知られるほか、木棺直葬の可能性の強い追田山古墳などの例もある。近年の発掘例としては、平成19(2007)年に発掘調査の行われた金田の曲第2~5号古墳がある。このうち曲第2号古墳は直径約12mの円墳で、土坑内に組合式木棺を納め、両端の小口に礫を詰めて裏込めとしている。古墳からは木棺内に置かれていた短甲と刀や短剣が出土した。曲第3号古墳は直径約6mの小規模な円墳で、埋葬施設は箱式石棺である。曲第4・5号古墳もこれと同様な小規模な円墳であるが、埋葬施設は不明である。築造は曲第2号古墳が5世紀後半で、曲第3~5号古墳も5世紀後半~6世紀前半と推測されている。その他、上記の稻干場第2~4・9号古墳は、直径約9~12mの円墳であり、埋葬施設は第2~4号古墳が土坑、第9号古墳が箱式石棺である。築造は6世紀前半頃と推定されている。



第2図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)

- | | | | | |
|-----------|------------|------------|---------------|----------|
| 1 川古墳群 | 2 常定川平1号遺跡 | 3 常定川平2号遺跡 | 4 常定横穴群 | 5 峯双遺跡 |
| 6 峰双横穴群 | 7 峰双製鐵遺跡 | 8 峰双窯跡 | 9 中野谷窯跡 | 10 追田山古墳 |
| 11 稲干場古墳群 | 12 黒岩城 | 13 原畠遺跡 | 14 番久遺跡 | 15 曲古墳群 |
| 16 川西古墳群 | 17 中郷古墳群 | 18 池津古墳群 | 19 向泉川平1・2号遺跡 | |

横穴式石室をもつ古墳としては、玄室と羨道の区別が明らかでない簡略化した石室形態のものが多いが、高瀬古墳、七塚第2号古墳、どんで古墳、堂の前古墳のように片袖式の石室の古墳もみられる。⁽³⁾ 昭和53（1979）年に調査された池津第1号古墳は直径約12.8mの円墳で、石室の規模が全長8.65m、最大高1.76mを測り、この地域では最大である。出土した須恵器から6世紀後半のやや新しい時期に築造され、7世紀前半にかけて追葬が行われたと想定されている。⁽⁴⁾ 平成10（1998）年に調査された金田第2号古墳は直径約15mの円墳であり、長さ約5.3mの無袖式の石室を有する。石室内から多くの遺物が出土し、閉塞石前の墓道からも須恵器が二段に重ねられた状態で数点出土した。また、石室入口部の左右には石で台を造り、須恵器の大甕が据えられていた。⁽⁵⁾ 築造は6世紀末から7世紀初頭頃と考えられている。

その他とくに注目されるのは、出雲地方を中心に山陰に分布する横穴墓がみされることである。現在、町内では常定で8基、湯木の明正寺裏で7基、向泉の下日南で1基が確認されている。このうち、常定第1・2号横穴の調査が昭和33（1958）年に、⁽²⁾ 峰双第1～6号横穴の調査が昭和39（1964）年に行われている。横穴墓は、ほとんどが切妻式家形構造の簡略化した妻入り両袖式の平面形態をとり、アーチ状の天井部を有する。羨道部には石積みを行い、天井石を架構したものもみられる。これらの横穴墓は、出土した須恵器などから6世紀末～7世紀頃の造営とみられ、出雲文化の影響を示すものと考えられる。

また、峰双横穴群の周辺では、須恵器や鉄の生産に関わる遺跡も見つかっている。須恵器の窯跡は、峰双と中野谷で確認されている。峰双窯跡は林道工事の際や峰双第2号横穴の構築によって大半が破壊されていたが、地下式の登窯である。出土遺物はみつかっていない。また、中野谷窯跡は、峰双窯跡から約500m離れて南北方向に延びる支谷の開削された東斜面にある。窯跡の構造は明らかではないが、多量の須恵器片や窯壁などが散布しており、6世紀後半に比定されている。⁽³⁾ また、峰双窯跡に近接して峰双製鉄遺跡があり、これも古墳時代～古代の製鉄遺跡とみられている。⁽⁴⁾ こうした生産遺構や横穴墓の存在は、当時この地域にあった集団の生業や出自を考える上で重要な手がかりになるものと考えられる。

古代の律令制下では、旧口和町域は比和・高野地域と庄原市西北部とともに備後国恵蘇郡に属した。恵蘇郡は恵蘇・刑部・春日部の三郷からなり、口和町域は概ね刑部郷に比定されている。

「刑部」・「春日部」などの郷名は、律令制以前の時代に中央王族の部民（私有民）が設置されたことに由来するとされ、この地域が古くから中央との深い関わりをもっていたことをうかがわせる。平城京出土木簡や文献史料によると、律令制下の備後北部の諸郡では、絹糸の代わりに鉄や鍼を調として都に貢納していたことがみえる。口和町内でも、奈良～平安時代の製鉄炉跡である金田石谷製鉄遺跡の発掘調査が行われており、上記の峰双製鉄遺跡の存在も考えあわせると、この地域でも古くから鉄生産の盛んであったことがうかがわれる。

中世以降の発掘調査例はないが、町内には中世の城跡が多く存在している。大月の黒岩城跡は、大永～文禄年間（1521～1592）にかけて、この地域を支配した泉氏の山城である。この山城の近くでは、山陰の尼子氏と山陽の毛利氏が天文22（1553）年に激戦を繰りひろげ、城主の泉氏は毛

利方につき勝利した（泉合戦）。当時この地方は、尼子氏と毛利氏との争いの最前線にあたり、黒岩城は政治的・軍事的にきわめて重要な拠点であった。

参考文献

- ・後藤謙一監修『広島県の地名』日本歴史地名大系第35巻 平凡社 1982年
- ・竹内理三編『角川日本地名大辞典』第34巻広島県 角川書店 1987年
- ・口和町教育委員会『口和町誌』 2000年
- ・広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅸ』 2003年

註

- (1) 個別の遺跡名については、広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅸ』（2003年）に記載された名称による。
- (2) 潮見 浩「備後口和村常定の横穴発掘調査」「古代吉備」第3集 古代吉備研究会 1959年
- (3) 広島県教育委員会「常定峯双遺跡群の発掘調査報告」「広島県文化財調査報告」第7集 1967年
- (4) 広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』 1979年
- (5) (財) 広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』 1999年
- (6) 広島大学大学院文学研究科考古学研究室『金田石谷製鉄遺跡』 2003年
- (7) 口和町内では、平成19（2007）年に曲第2～5号古墳と稲干場第2～4・9号古墳が、平成20（2008）年には向泉川平1・2号遺跡、川平第1号古墳、常定川平1・2号遺跡、番久遺跡、原畠遺跡が、平成21（2009）年に石谷2・3号遺跡が、平成22（2010）年には石谷2号遺跡（第2次）の調査が行われている。
- (8) 劍形石製模造品は古墳時代中期に盛に行し、祭祀に関わるものと考えられている。原畠遺跡を含め、現在県内では5例を数える（財団法人広島県教育事業団『平成22年度ひろしまの遺跡を語る 古墳時代の暮らしこと心 記録集』2011年）。
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第2～5号古墳』 2011年
- (10) 安間拓巳『日本古代鉄器生産の考古学的研究』溪水社 2007年
- (11) 平城京出土の木簡としては「備後國三上郡調銅壹拾口 天平十八年」「三上郡信敷郷調銅十口」などがある。また、文献史料には「類聚三代格」延暦廿四（805）年十二月七日太政官奏 がある。いずれも広島県『広島県史』古代中世資料編 I 1974年 による。

III 調査の概要

川平第1号古墳、常定川平1号遺跡、常定川平2号遺跡は、北から南に延びる標高283～304mの同じ丘陵上にある。最も北側で且つ高所に位置している常定川平2号遺跡から南に約250m離れて常定川平1号遺跡が、さらに約160m離れた丘陵の先端部に川平第1号古墳が位置している。

1 川平第1号古墳

直径約13mの円墳と推定される古墳の東側一部100m²を発掘調査し、墳丘の裾部と周溝を検出した。周溝の規模は幅1.1m、深さ0.6mで、下層から土師器の壺、須恵器の短頸壺・杯蓋片・杯身片が出土した。また、周溝外から鉄滓1点が出土した。埋葬施設は、部材と思われる石が周溝覆土の中層から出土したことや、墳頂部が平坦であることから、箱式石棺か石蓋土坑と思われる。本古墳の築造時期は、出土遺物から6世紀後半頃と考えられる。

2 常定川平1号遺跡

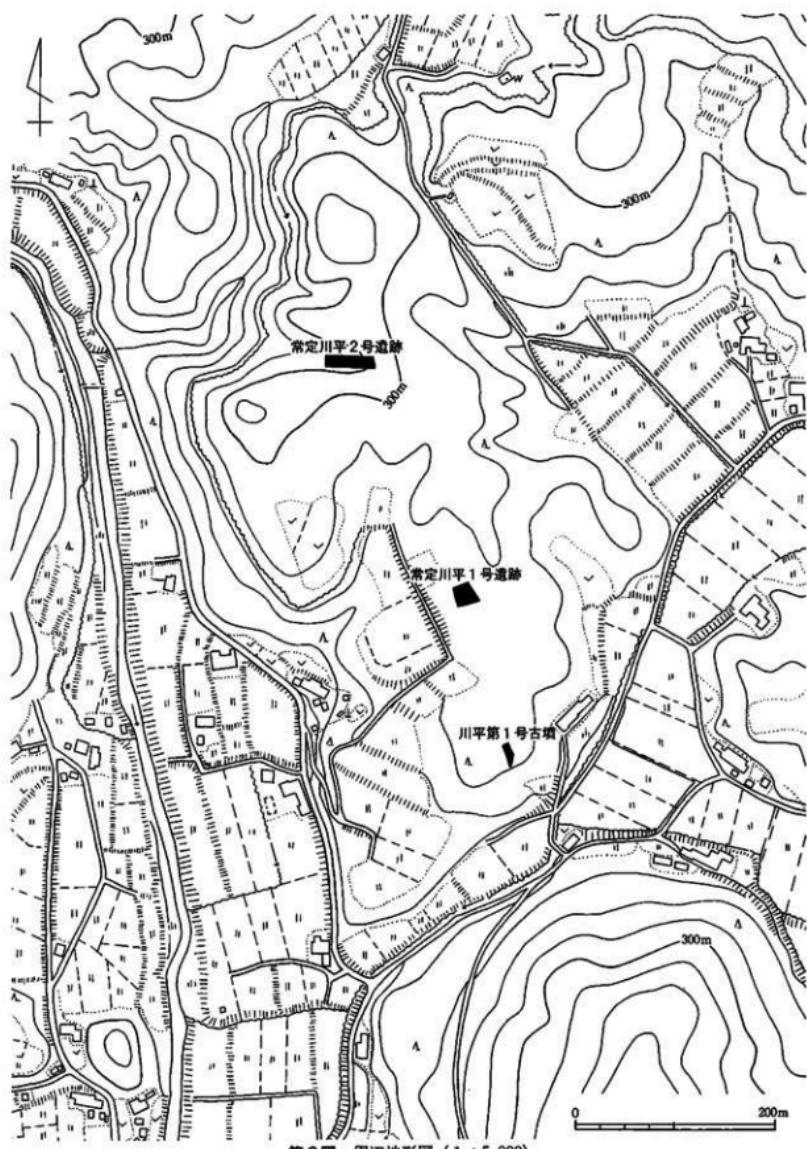
南から北へ緩やかに下る斜面360m²を発掘調査し、造付けのカマドを伴う竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴状のビット11基を検出した。

竪穴住居跡は、東西方向6.3m、南北方向5.9mのやや変形した方形の竪穴住居である。柱穴は径0.37m～0.51m、深さ0.48m～0.73mのものが4基であった。住居跡の中央には炉跡と思われる径1.40m、深さ0.10mの浅い土坑を確認した。カマドは、壁面を斜めに掘削して両側に配置した石を粘土で覆ったものである。このカマド付近で、土師器の壺3点が据えた状態、その上に壺1点が横に置いた状態で出土した。住居跡からは、須恵器の壺・杯蓋片・杯身片、鉄滓のほか、垂木と思われる炭化材も出土しており、焼失家屋と考えられる。出土遺物から6世紀末～7世紀初め頃の住居跡と思われる。

掘立柱建物跡は、桁行2間(4.60m)×梁行1間(3.20m)である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

3 常定川平2号遺跡

丘陵に西から東へ貫入する谷沿いの、長さ47m～50m、幅11mの範囲を発掘調査し、土坑4基を検出した(SK1～4)。4基の土坑は約4.5m～8.5mの間隔で列状に並ぶ。土坑の平面形は、SK1がほぼ隅丸長方形で、その他はほぼ長方形である。規模は、長さ約1.5m～1.8m、幅約0.75m～1.3m、深さ約0.6m～1.2mである。主軸(長軸)は北西～南東ないし南～北方向をさす。遺物は、SK1の埋土下層から縄文土器と思われる破片が出土したが、これ以外には確認できなかった。SK1は出土遺物や立地条件などから縄文時代の陥穴の可能性が高く、SK2～4は形状が土坑墓に似ているが、立地などから同様の陥穴とみられる。



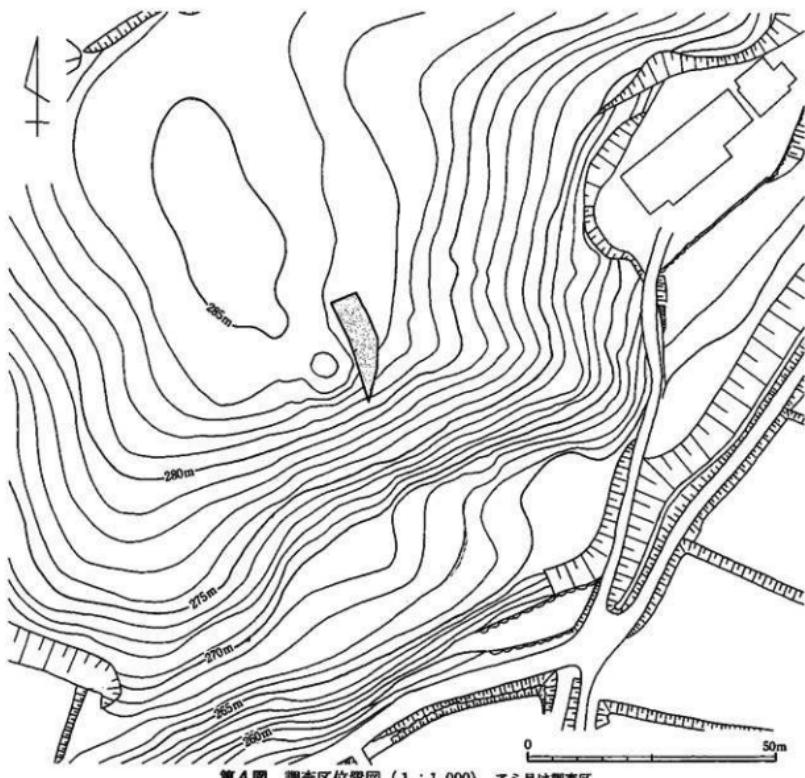
第3図 周辺地形図 (1 : 5,000)

IV 川平第1号古墳

1 立地と調査前の状況

川平第1号古墳は、北から南に延びる低丘陵の先端部に立地している（標高283～285m）。南側直下の水田面とは約23mの標高差がある。西には、西城川の支流である萩川にそって水田地帯が広がり、南や東にも谷に水田がみられる。なお、萩川は直線距離で約5.5kmの狭長な谷あいを蛇行しながら南流しており、その中間地点に本古墳は位置している。

調査前の観察では墳丘を明確に確認でき、墳丘裾部のおよその位置や周溝の存在が想定できる状況であった。なお、過去の分布調査によると、丘陵先端部に本古墳を含めて3基の古墳が存在するとされていたが、今回調査の対象となったのは本古墳だけである。

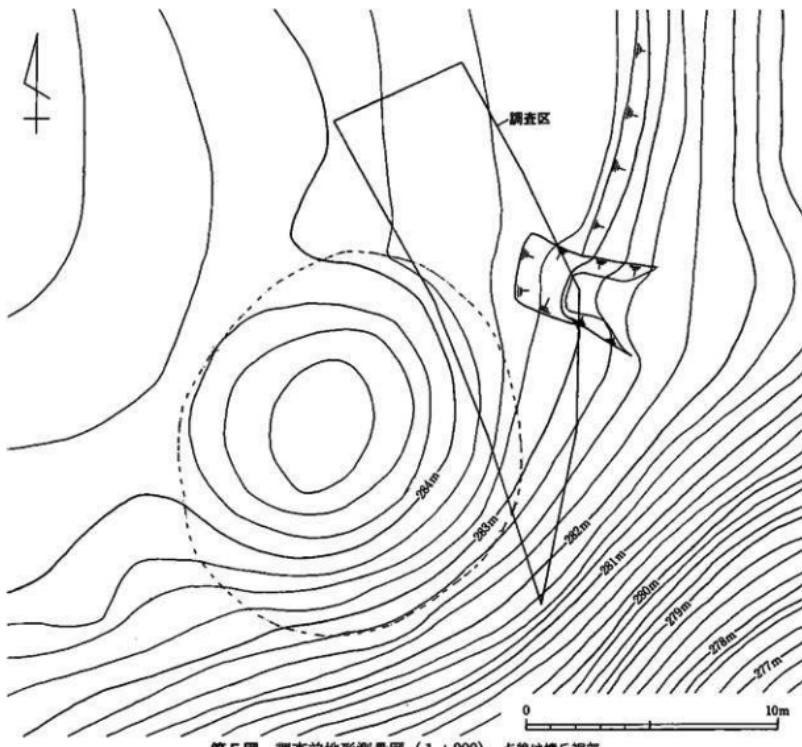


第4図 調査区位置図 (1 : 1,000) アミ目は調査区

2 調査の概要

川平第1号古墳の調査範囲は、古墳東側の一部100m²であったが、許可を得て全体の地形測量を実施することができた。これによって本古墳は、直径が約13mの円墳であることが推定された。古墳南側の墳丘裾部から先は急な斜面となっているため、北側の平坦面を中心周溝が2／3周ほど廻っており、規模は幅1.10m、深さ0.60mであった。埋葬施設は、墳頂部が平坦であることや、埋葬施設の部材と思われる石が周溝覆土の中層から出土したことから、箱式石棺か石蓋土坑と思われ、早い段階で攪乱を受けた可能性がある。周溝覆土を掘り下げた際に、下層から土師器の堆、須恵器の短頸壺・杯蓋片・杯身片が出土した。本古墳の築造は、これらの出土遺物から6世紀後半頃と考えられる。

なお、古墳の東に隣接して、長さ5m、幅3m、深さ0.5mの落ち込みがあったが、これは炭焼きに関わって、現代に使用されたものと思われる。



第5図 調査前地形測量図 (1 : 200) 点線は墳丘裾部

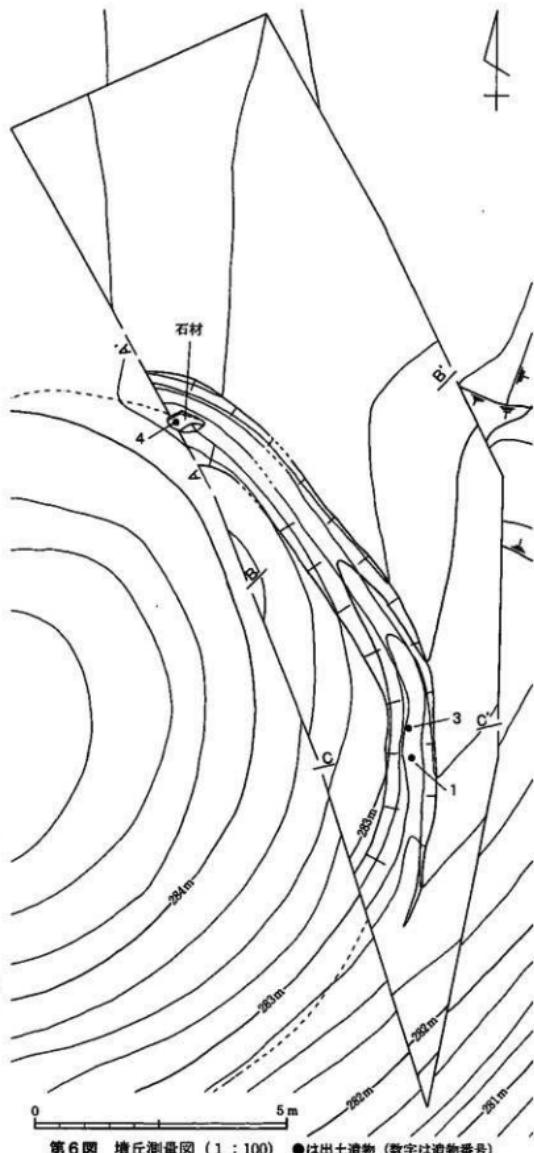
3 遺構と遺物

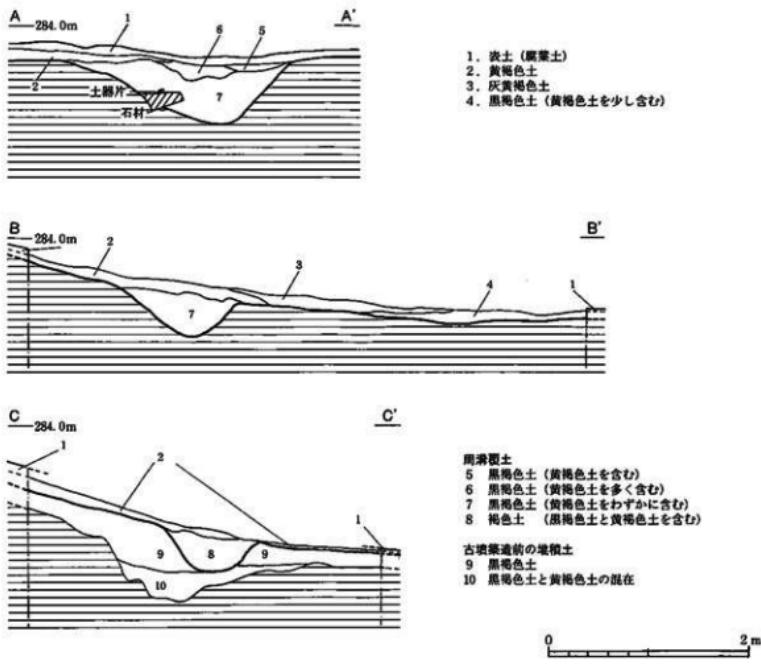
(1) 墳丘と周溝

今回の調査では、墳丘の裾部と周溝の一部のみを検出した。墳丘の大部分は調査区外にあたるが、地形測量の結果から本古墳は、直径が約13m、高さ約1.8mの円墳と推定される。調査区内の土層は上から、表土（腐葉土）、暗黄褐色土、黒褐色土（クロボク）、黄褐色土の順であり、周溝は黒褐色土から掘り込まれていた。

墳丘の中央部は比較的平坦である。中心より西にややずれて最高位があり、標高は284.85mであった。古墳の南は急な斜面となるため、墳丘南側の裾部は削り出すことによって、ほかは周溝によって区画されていると考えられる。盛土は主に黒褐色土で、盛土中や墳丘上から遺物は出土していない。

周溝は、古墳の東側にあたる調査区内で、長さ約13mにわたって確認することができ、墳丘盛土である黒褐色土と、その下層の黄褐色土が混ざった土で埋没している。規模は、調査区の北（古墳の北北東）で幅1.1m、深さ0.6m、調査区の中央（古墳の東）で幅1.1m、深さ0.4m、調査区の南（古墳の南東）で幅1.0mであり、これより南は周溝が不明瞭となり、調査区外に





あたる古墳の南西側でも同様と予想されるため、周溝は全周せず斜面の上を中心に2／3程度廻るものと推定される。

(2) 出土遺物

遺物の出土状況

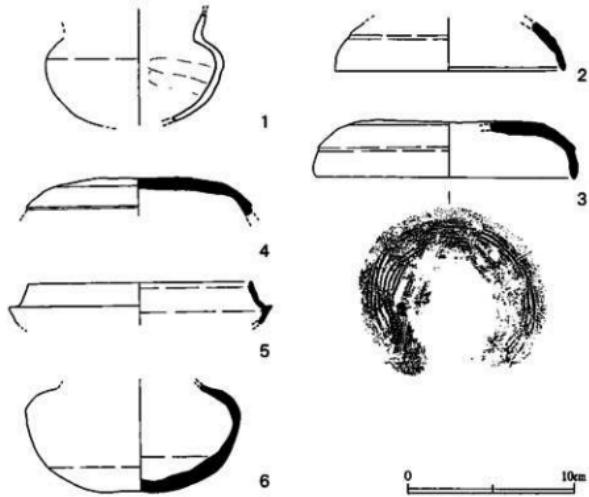
周溝内から土師器・埴1点と須恵器・短頸壺1点、杯蓋片3点、杯身片1点が出土した。このうち、埴(第8図1)と杯蓋片1点(第8図3)は古墳南東側の周溝底面上からの出土である。その他に、古墳南側の周溝覆土上～下層から杯蓋片1点(第8図2)と杯身片(第8図5)を、北東側の周溝覆土中層から杯蓋片1点(第8図4)を、東側の周溝覆土上層～下層から短頸壺(第8図6)が出土した。

これらの遺物の他に、古墳北東側の周溝覆土中層からは長さ75cm、幅40cm、厚さ9～18cmのやや平らな石材1点が出土し、埋葬施設の部材であったと考えられる。

出土遺物（第8図1～6、図版14—1・3・4・6）

1は土師器・壇である。口縁部は失われているが、頸部が約1／3程度残存し、やや外反気味に立ち上がる。肩部が張り出し、ゆるやかにカーブして下方に続く。調整は、頸部から胴部にかけての内外面に横方向のナデを施す。底部付近の外面に一部、ヘラ削りが認められる。

2～6は須恵器で、2～4は杯蓋片である。2は天井部が失われているが、口縁部はゆるやかにカーブして下方に続く。口縁端部を尖り気味におさめ、断面が三角形状をなす。口縁端部内面は段をなす。調整は内外面とも回転ナデを施す。3・4は天井部を平坦につくるが、3は成形時の押圧で中央部がやや窪む。3・4ともに天井部と口縁部との境は明瞭で、3は鈍い稜線を、4はシャープな稜線をなす。口縁部は4が失われているが、3は口縁部がほぼ垂直に下がり、端部を丸くおさめる。調整は、3・4ともに天井部外面に回転ヘラ削りを施す。3は口縁部までの内外面に回転ナデを施す。また、天井部内面には不定方向のナデを施すが、成形時に下支えに用いたと思われる同心円状の当て具の痕跡がみられる。4は口縁部外面から天井部内面まで回転ナデを施す。5は杯身片である。長めのたちあがり部は内傾し、端部内面はやや尖り気味におさめる。口縁端部内面に段の痕跡を残す。受部は短く直線的に外上方にのびる。調整は、口縁部から体部にかけて内外面とも回転ナデを施す。6は短頸壺で、口縁部から頸部にかけては失われている。肩部が張り出し、ゆるやかにカーブして下方に続く。底部は丸底である。調整は、底部から胴部下位にかけての外面に回転ヘラ削りを行うが、底部はヘラ切り未調整で、粘土の残滓がみられる。その他の調整は、胴部中央から頸部にかけての外面、および底部から頸部までの内面は回転ナデを施す。頸部から胴部上半の外面にかけては、焼成時の変色により黄白色の斑点が斑状に広がる。



第8図 周溝出土遺物実測図（1：3）

4 まとめ

川平第1号古墳は、口和町の南西部を南流する萩川を西に望む低丘陵の先端部に立地する（標高283～285m）。南側の水田面との標高差は約23mである。今回の調査は古墳東側の周溝部分に限られているため、古墳の全容は明らかではないが、調査前の地形測量により直径が約13mの円墳であることが推定された。以下では、本古墳の調査成果について整理しておきたい。

まず周溝については、周溝は全周せず、斜面下方の南側の埴丘裾部には廻っていない。この部分は斜面の傾斜が急になっているため、古墳の築造には斜面を削るだけで周溝は掘らなかったとみられる。次に、埋葬施設については、古墳の墳頂部が平坦になっており、また周溝の櫻土中層から埋葬施設の部材とみられる石材が出土した点から考えて、墳頂部に箱式石棺や石蓋土坑など石材を用いた埋葬施設が設けられていた可能性が高い。

古墳の築造年代については、周溝内から出土した須恵器・杯蓋の形態によれば、陶邑編年のⅡ形式4段階、6世紀後半頃の築造と考えられる。⁽¹⁾ この地域の古墳の発掘調査例は湯木川流域の池津第1号古墳⁽²⁾、金田の金田第2号古墳⁽³⁾や曲第2～5号古墳⁽⁴⁾、大月の稻干場第2～4・9号古墳の調査がある。これらの古墳の築造時期は、曲第2～5号古墳（2号墳が木棺、3号墳が石棺、4・5号墳は不明）が5世紀後半～6世紀前半、稻干場第2～4・9号古墳（9号墳が石棺、その他は木棺）は6世紀前半、池津第1号古墳（横穴式石室）が6世紀後半、金田第2号古墳（横穴式石室）が6世紀末～7世紀初頭であり、6世紀後半以後、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築造されている。したがって、本古墳の築造は横穴式石室が導入される時期と重なるが、墳頂部に埋葬施設の存在が推定される本古墳は、横穴式石室ではない古墳の可能性が高い。

なお、本古墳の所在する常定地区では、6世紀後半以降、横穴墓の造営や須恵器・鉄の生産が行われるなどの新たな動きがみられるようになる。こうした在地社会の動向を視野に入れて、本古墳の歴史的な性格を明らかにしていくことが重要であろう。

註

（1）中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏香房 1981年

（2）広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』 1979年

（3）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』 1999年

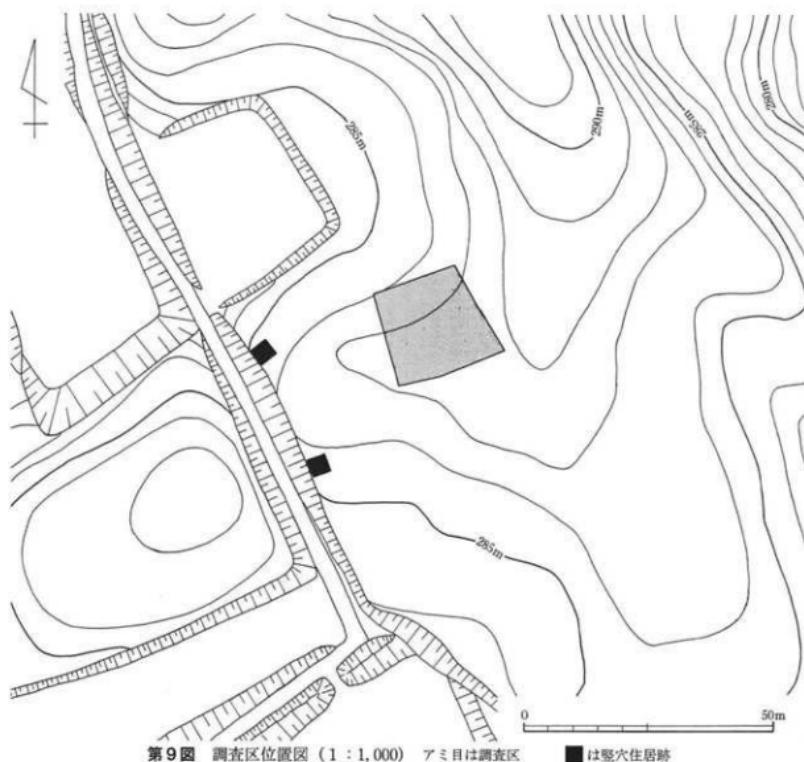
（4）財団法人広島県教育事業団『中国自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第2～5号古墳』2011年

V 常定川平1号遺跡

1 立地と調査前の状況

常定川平1号遺跡は、北から南に延びる低丘陵上に立地している（標高286～288m）。西側の水田面との標高差は約40mである。遺跡の北側は、西から東に貫入する小さな谷へと下る緩やかな斜面になっている。丘陵の西側には南流する萩川にそって水田地帯が広がり、遺跡の直下でも、北西側の小谷などに水田が開かれている。

調査前の状況は山林であり、大きな削平や搅乱の痕跡はなかった。試掘調査で竪穴住居跡1軒が確認されていたが、遺跡近くの農道法面でも竪穴住居跡2軒を確認し、単一の住居でなく小規模な集落と推定された。



2 調査の概要

調査区は、南から北へ緩やかに下る斜面であり、調査面積は360m²である。調査区の中央で竪穴住居跡1軒を検出した。住居跡の規模は6.3m×5.9mで、柱穴は4基である。住居南辺のやや東寄りに造付けのカマドがある。カマド付近からは土師器の壺3点が据えた状態、その上に壺1点が横に置いた状態で出土した。住居内からは、須恵器の椀・杯蓋片・杯身片、鉄滓のほか、垂木と思われる炭化材も出土している。また、調査区の南西部で掘立柱建物跡1棟、調査区の南東部や南西部で11基の柱穴状のピットを検出した。

遺構検出面までの土層は、上から順に、表土（腐葉土）、暗黄褐色土、黒褐色土（クロボク）であり、その下に黄褐色土がある。表土掘削は、試掘トレンチの土層観察や試掘調査のデータをもとに、竪穴住居跡を確認した面（調査区南側では黄褐色土面、調査区北側では黒褐色土中）まで行った。その後、調査区北側の黒褐色土中で、竪穴住居跡以外に平面で遺構を確認できなかったため、トレンチを4本設定して黄褐色土面まで掘り下げ、トレンチ土層断面及び黄褐色土面で確認作業を行ったが、遺構は存在しなかった。



第10図 遺構配置図 (1 : 200)

3 遺構と遺物

常定川平1号遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡（SB1）1軒と掘立柱建物跡（SB2）1棟、柱穴状のピットが11基である。遺物は、竪穴住居跡から土師器（甕）、須恵器（碗・杯蓋・杯身）、鉄滓が出土し、調査区内からも土師器片や須恵器片が出土した。なお、SB1は焼失家屋で、重木とみられる炭化材が出土した。

（1）竪穴住居跡（SB1、第11図・第12図）

立地 調査区の中央部に位置し、南から北へ緩やかに下る斜面上に立地する（標高287m）。住居の長軸は等高線にほぼ平行し、北東—南西方向を指す（N68° E）。

規模 北壁側を一部流失するが、東辺長4.5m、西辺長5.2m、南辺長6.3m、北辺長5.9mである。平面形はやや台形状をなし、東から西に向けて広がる。床面積は約27m²である。壁高は、最も残りのよい北東隅で約0.45mである。

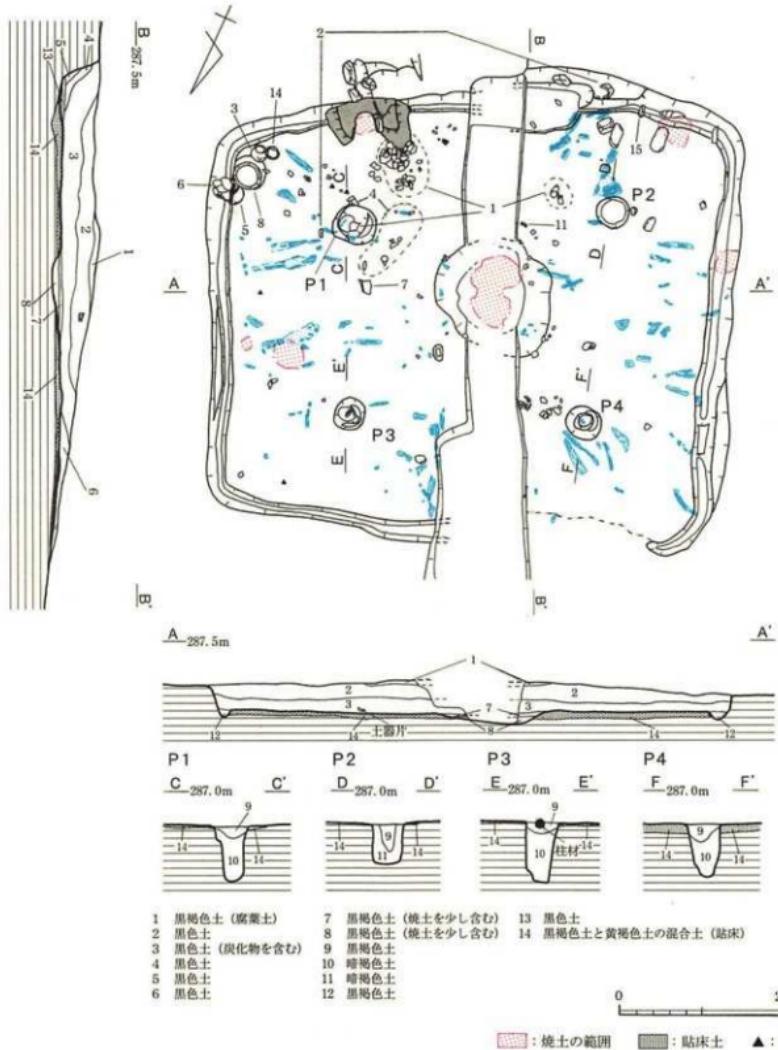
壁溝 流失した北西側を除く壁際を、下端幅3～13cm、深さ4～9.5cmの壁溝がめぐる。なお、壁溝は南側中央部でも一部途切れるが、ここは住居の出入口であった可能性がある。

床面 東側から西側に向かって傾斜する。なお床面には、黒褐色土と黄褐色土の混ざり合った土で厚さ6cm程度の貼床を施している。

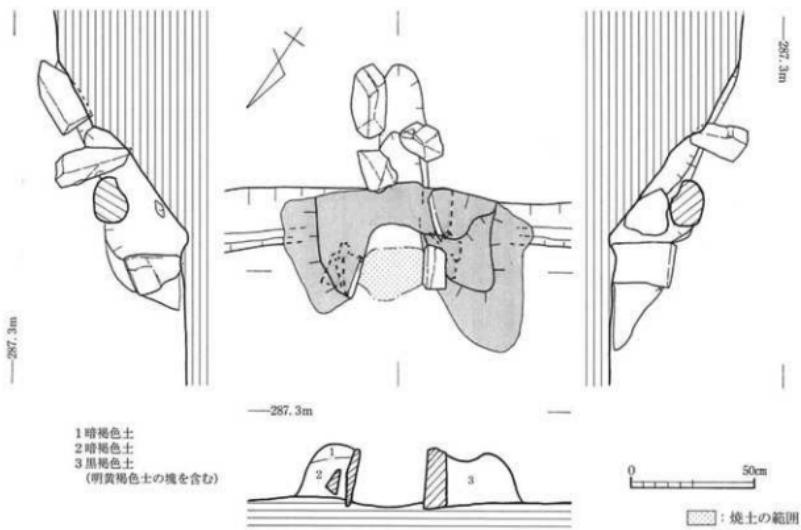
主柱穴 主柱穴と思われるピットは4個（P1～P4）、主柱を方形に配した4本柱構造の住居と考えられる。主柱穴間の距離は、P1～P2間が3.20m、P1～P3間が2.30m、P2～P4間が2.55m、P3～P4間が2.90mである。主柱穴に囲まれた範囲は住居の平面形に似てやや台形状をなす。各主柱穴の規模は、P1が長径0.51m、短径0.45m、深さ0.65m、P2が正円形で径0.40m、深さ0.48m、P3が長径0.40m、短径0.37m、深さ0.73m、P4が長径0.44m、短径0.37m、深さ0.63mで、P2以外は二段掘りである。なお、P3からは、幅15cm、奥行き11cm、高さ12cmの炭化した柱材が、立ったままの状態で出土した。

炉跡 4個の主柱穴に囲まれた床面中央に浅い掘り込みを検出した。現存規模で径1.40m、深さ0.10mを測る。この掘り込みの底面は0.9m×0.6mの範囲にわたって焼けており、埋土にも焼土が少し含まれることから、炉跡と考えられる。

カマド跡 住居跡の南東隅から1.2m程度西（中央）寄りの南壁で造付けのカマドを検出した。燃焼部の左右（東西）には袖部が残存する。左（東）側の袖部は南壁からの長さ0.47m、幅0.31m、高さ0.22mである。右（西）側の袖部は南壁からの長さ0.60m、幅0.40m、高さ0.34mである。両袖部は薄く平らな石を芯材とし、これを小石で補強し暗褐色土ないし黒褐色土で覆う。左（東）側の袖部は24cm×16cm、幅4cmの芯材を用い、燃焼部側の面が露出する。右（西）側の袖部は2枚の芯材を用い、手前に25cm×17cm、幅9cmの、奥側に23cm×21cm、幅9cmの芯材を配する。前者は全体が、後者は燃焼部側の面が露出する。燃焼部は、底面が0.25m×0.20mの範囲にわたり焼けている。煙道は天井部が失われているが、住居跡の壁面を奥行き0.5m程度（現存規模）の馬蹄形に掘り凹め、その両側に細長の石を配した構造だったと考えられる。煙道は燃焼部から斜め



第11図 SB 1 実測図 (1 : 60)



第12図 S B 1 カマド実測図 (1 : 20)

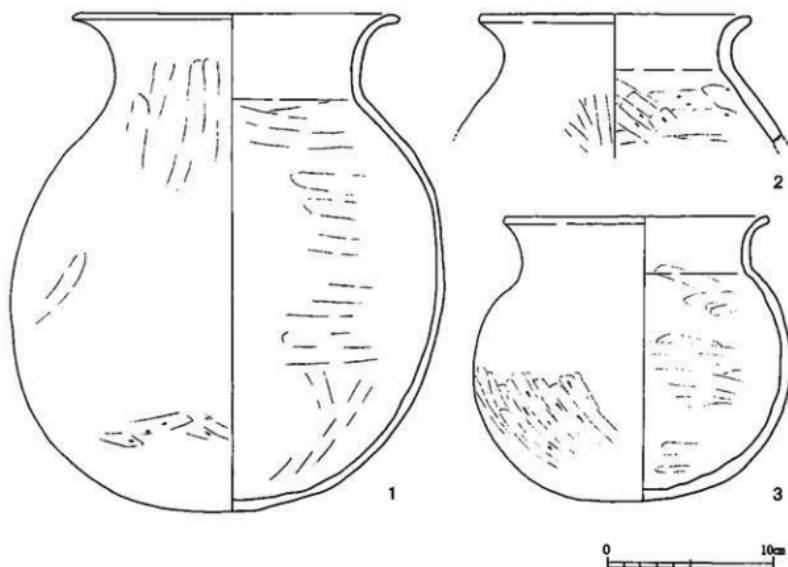
上方に立ち上がって南壁を貫く。その底面の立ち上がり角度はやや急で (35°)、その後はややなだらかとなって (25°) 煙出口につながる。なお、カマドの下に壁溝が若干認められることから、壁溝を掘った後でカマドを造ったものと考えられる。

その他 S B 1 は焼失家屋で、炭化材が床面から 5 ~ 6 cm 上の住居跡の覆土下層で出土した。炭化材は 10 cm 程度の太さで、概ね床面中央から放射状に散乱しており、住居の垂木と考えられる。

遺物の出土状況 土師器 8 点 (壺 1 ・ 順 7), 須恵器 6 点 (杯蓋 1 ・ 杯身 3 ・ 順 1 ・ 鉢 1), その他に鉄滓が少量出土した。遺物の分布は概ねカマドのある住居跡南東側に集中している。特に住居跡の南東隅では、土師器・壺 4 点 (第13図 3, 第14図 5・6, 第15図 8) と須恵器・鉢 1 点 (第16図 14) がまとめて出土した。このうち、壺 3・5・8 はほぼ完形に近い状態である。また、壺 6 は壺 5 の口縁上に横倒しで被さる状態で出土した。なお、壺 8 は出土した土器のうち最大で、床面を径 40 cm, 深さ 5 cm 程度に掘られた正円形の窪みの中に据えられていた。その他、カマドの右 (西) 側の袖部周辺から P 1 周辺にかけて土師器・壺 1 点 (第13図 1), 土師器・壺 3 点 (第13図 2, 第14図 4, 第15図 7), 須恵器・杯身 1 点 (第16図 11) が破片になって散乱していた。

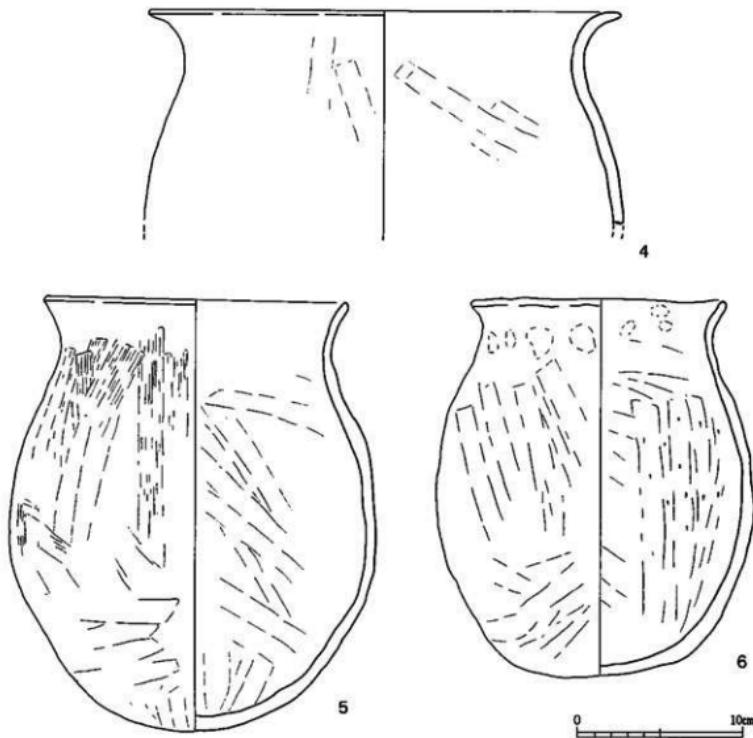
出土遺物 (第13~17図 1~15, 図版 14~16) 1 ~ 8 は土師器で、磨滅のため調整は全体に不明瞭である。1 は壺で、正円に近くよく膨れた胴部をもち、丸底である。つよく窄まつた頸部から外反して外上方に開き、口縁端部を丸くおさめる。口縁部は内外面ともに横方向のナデを施す。そ

の他の内面は、頸部から胸部上半にかけて横方向のナデを、胸部下半から底部にかけて縦方向のナデが認められる。同じく外面は、頸部から胸部上半にかけて縦方向のナデを、胸部下半から底部にかけて横方向のヘラ削りが認められる。色調は内外面とも淡黄褐色だが、外面は頸部から肩部にかけてやや淡橙褐色を呈する。2～8は壺である。2は窄まった頸部から外反して外上方に短く延びる口縁の端部を丸くおさめる。調整は、口頸部が内外面ともに横方向のナデを施す。その他の内面は、頸部から肩部にかけて横ないし斜め方向のヘラ削りを施し、同じく外面には縦ないし斜め方向のナデが認められる。色調は、内外面とも淡黄褐色だが、頸部から口縁部にかけて、内外面のごく一部が橙褐色を呈する。3はほぼ完形である。胸部がやや扁球状の器形である。窄まった頸部から外反して外上方に延びる口縁の端部を丸くおさめる。調整は、口頸部が内外面ともに横方向のナデを施す。その他の内面は、頸部から胸部上半にかけて横方向のヘラ削り後に横方向のナデを、胸部下半から底部にかけては横方向のナデが認められる。同じく外面は、頸部から胸部上半にかけて縦方向のナデが認められ、胸部下半から底部にかけては斜め方向のヘラ削り後、斜め方向のナデを施す。色調は内外面とも淡黄褐色だが、外面は口縁端部から胸部下半にかけて煤が斑状に付着し、とくに頸部と肩部に濃密に付着する。底部内面に焦げつきもみられる。4～6は長胴形で、胸部上半が張らず、頸部はしまりがない。口縁部は4がややつよく、5・6

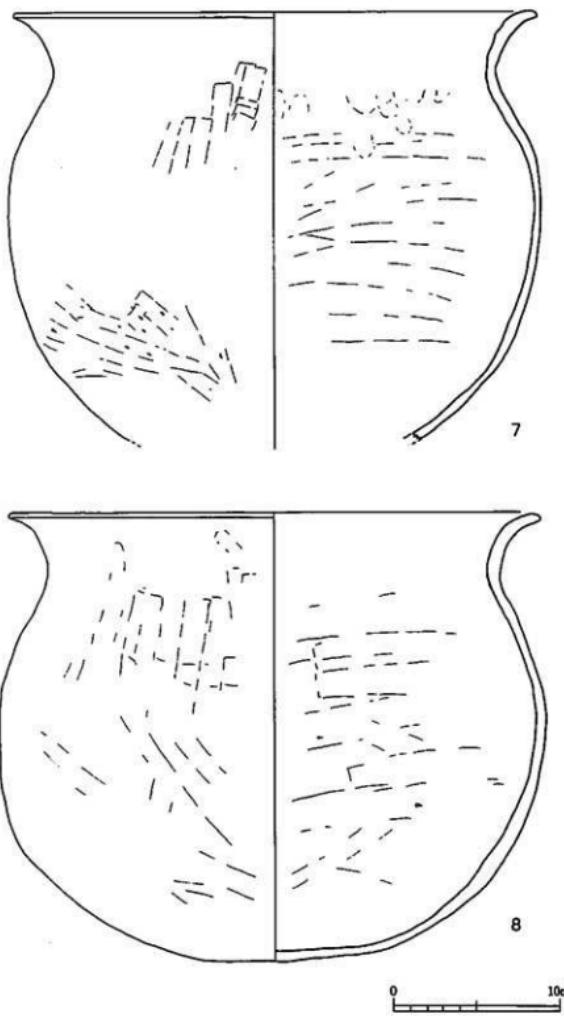


第13図 SB 1出土遺物実測図 (1) (1 : 3)

はゆるやかに外反し、いずれも端部は丸くおさめる。調整は、4～6が口頸部は内外面ともに横方向のナデを施し、6では指頭圧痕が認められる。4は器面の磨滅が著しいが、胴部上半は内面に斜め方向のナデが、外面に縦方向のナデが認められる。5は胴部内面に横ないし斜め方向のナデを施す。外面は胴部上半に板状工具による縦方向のハケ目が認められ、胴部下半は縦ないし横方向のナデを施す。また、底部の内外面には縦方向のナデを施す。6は胴部内面に縦方向のヘラ削り後に、横ないし斜め方向の強いナデを施す。外面は胴部上半に縦方向の粗いナデを、胴部下半から底部にかけて斜め方向の粗いナデを施す。4～6の色調は淡黄褐色だが、外面に煤の付着がみられ、とくに6は胸部を中心に濃密に付着する。7・8は胸部最大径30cm以上、器高25cm以上を測る大型の壺で、8はほぼ完形である。7・8はいずれも胸部がやや扁球状で、窄まった頸部から外反して外上方に延びる口縁の端部を丸くおさめる。7・8の調整は、口頸部の内外面に



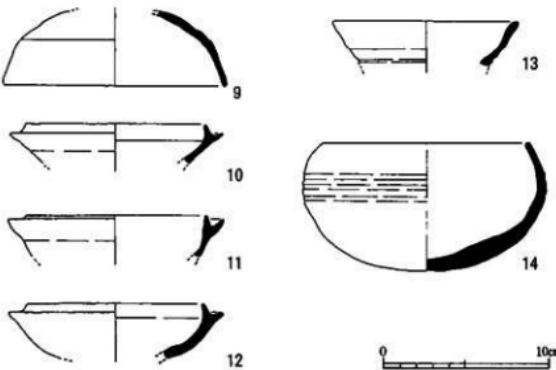
第14図 SB 1出土遺物実測図 (2) (1 : 3)



第15図 SB 1出土遺物実測図 (3) (1 : 3)

横方向のナデを施し、7は頸部から肩部にかけて、内面にかすかに指頭圧痕が認められる。7は、胴部内面に丁寧な横方向のナデを施す。外面は、頸部から肩部にかけて板状工具による縦方向のナデを、胴部中央にも丁寧なナデを施す。また、胴部下半には斜め方向のヘラ削りを施した後にナデを施す。色調は、口縁部から頸部にかけて外面が淡黄褐色を呈するが、全体に内外面とも熟変により橙褐色を呈し、とくに肩部から胴部下半にかけて外面は強い赤味を帯び、一部は煤で黒ずんでいる。8は、内面が頸部から胴部上半にかけて横方向のヘラ削り後に横方向のナデを、胴部下半から底部にかけて縦方向のナデを施す。外面は、頸部から胴部上半にかけて一部不定方向のナデが認められるが、胴部上半は板状工具による縦方向のナデを、胴部下半に斜め方向のナデを施す。色調は淡黄褐色を基調とするが、内外面全体が熟変により橙褐色を帯びている。また、煤が胴部を中心に濃く付着してほぼ全周し、底部内面にも煤の付着がみられる。

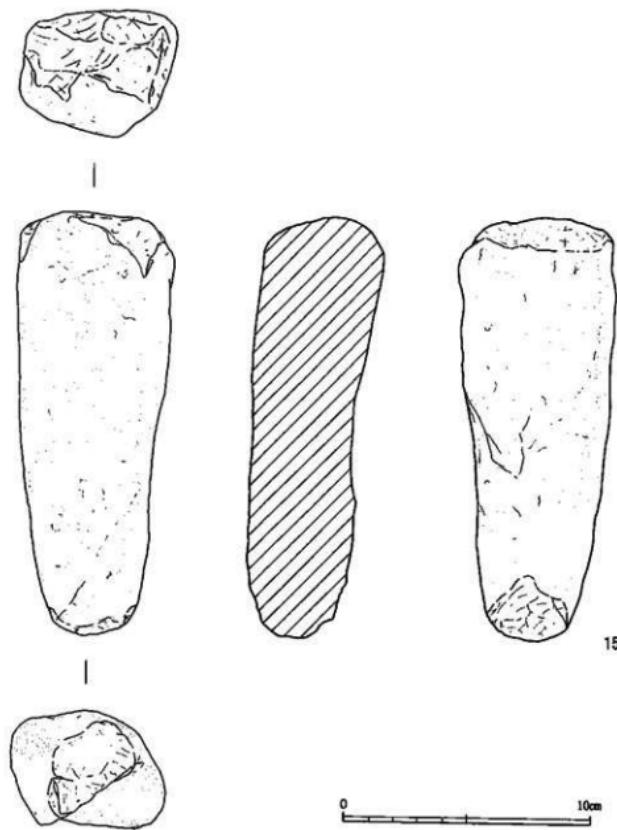
9～14は須恵器で、9は杯蓋片で、丸みを帯びた天井部からゆるやかに外下方に延び、口縁部は屈曲して広がり気味に垂下し、端部をやや尖り気味におさめる。調整は、天井部の外面が回転ヘラ削り後に回転ナデを、内面に横方向のナデを施す。口縁部は内外面ともに回転ナデを施す。焼成は不良で、色調は内面が橙褐色を、外面が淡灰褐色を呈する。10～12は杯身片である。たちあがり部は10・12がやや内傾し、11は直立て、端部はいずれも尖り気味におさめる。受部はごく短く外上方に延びて、端部は10・11が尖り気味に、12は丸くおさめる。調整は、内外面ともに回転ナデを施す。色調は、10が内外面とも青灰色、11は内面が灰白色、外面が青灰色、12は内面が青灰色、外面が淡青灰色で表面は熟変による光沢がみられる。13は甌の口縁部片である。口縁部は直下に段を有し、その直上もつよい回転ナデで段状をなして外上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は淡青灰色である。14は鉢で、口縁部が一部内側にゆがんでいる。丸底で、胴部中央が張り出しそこに二条の段がめぐる。口縁部はゆるや



第16図 SB 1出土遺物実測図 (4) (1 : 3)

かに内上方に延びて、端部を丸くおさめる。調整は、口縁部から脇部にかけての内外面が回転ナデを施す。底部は内面につよいナデを施し中央部径5cm程度の範囲が窪んでいる。底部の外面は回転ヘラ削りを施す。

15は敲石で、棒状の石材の上下両端に敲打痕がある。石材は角閃玢岩で淡青灰色を呈する。最大長17.1cm、最大幅6.3cm、最大厚5.3cmで、重さ804gである。



第17図 SB 1出土遺物実測図 (5) (1 : 2)

(2) 堀立柱建物跡 (SB 2, 第18図)

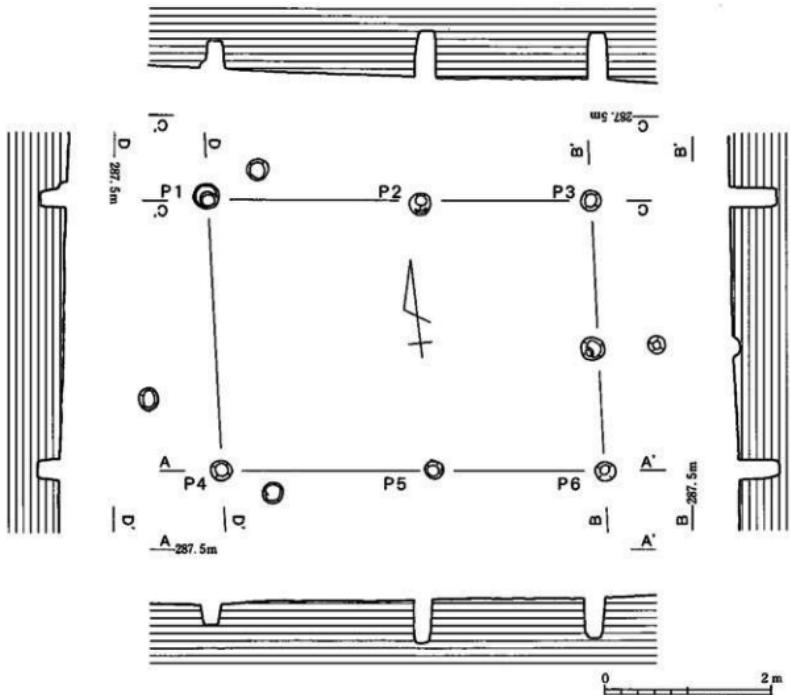
立地 SB 2は調査区の南西部に位置し、調査区の中央部に位置するSB 1とは約5m離れている(標高287m)。調査区全体は、南から北へ緩やかに下る斜面であるが、SB 2付近は平坦に近い。建物の桁行方向は尾根線に直交し、ほぼ東西方向をさす(N86°W)。

規模 桁行2間(4.60m)×梁行1間(3.20m)で、平面形は長方形である(建物面積14.7m²)。

柱間は、桁行P 1-P 2およびP 4-P 5ともに2.55m、P 2-P 3およびP 5-P 6ともに2.05mである。梁行は、P 1-P 4およびP 3-P 6ともに3.2mである。

主柱穴 P 1～P 6の平面形はいずれも円形であり、径0.23～0.31m、深さ0.26～0.57mである。それぞれの柱穴の大きさは、P 1が径0.31m・深さ0.33m、P 2が径0.26m・深さ0.57m、P 3が径0.24m・深さ0.57m、P 4が径0.26m・深さ0.26m、P 5が径0.23m・深さ0.54m、P 6が径0.25m・深さ0.53mである。P 1～P 6の覆土はいずれも、暗褐色土に黒褐色土と黄褐色土が混入したものである。

出土遺物 遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第18図 SB 2実測図 (1 : 60)

4 まとめ

常定川平1号遺跡は、口和町の南西部を南流する萩川を西に望む低丘陵上に立地する（標高286～288m）。西側の水田面との標高差は約40mである。今回の調査で検出した遺構の内訳は、堅穴住居（SB1）1軒、掘立柱建物跡（SB2）1棟、柱穴状のピット11基である。SB1は、出土した須恵器の杯蓋・杯身の編年によれば、陶邑編年のⅡ形式5段階、6世紀末～7世紀初め頃と考えられる。⁽¹⁾ その他の遺構については時期不明である。主な出土遺物は、土師器（壺・甕）、須恵器（杯蓋・杯身・壺・鉢）、石器（敲石）及び鉄滓である。ここでは、SB1の調査成果について整理しておきたい。

SB1は低丘陵上のはば平坦な場所に立地している（標高約287m）。SB1の北側から西側にかけては、丘陵に西から入り込んだ小谷に下る緩やかな斜面で、西斜面の下方にもSB1と同じ規模の住居跡2軒を確認した。SB1はこれらの住居跡を含め、北側に小谷を望む丘陵斜面上に小規模な集落を構成していたと考えられる。現在この谷部は水田になっており、当時も集落の耕地だった可能性は考えられる。SB1は4本柱構造の方形住居で、床面積の約27m²は比較的規模が大きいといえる。住居南東側の南壁には造付けのカマドを設けており、燃焼部は赤く焼けて恒常的な使用を示している。カマドの左（東）袖側の住居南東隅からは、完形に近い状態だったとみられる土師器の甕などがまとまって出土し、その中心には最も大きな甕（第15図8）が円形の浅い堆みに据えてあった。出土状況から、これらの土器はカマドをとりまく「厨房空間」に原位置を保っているとみられる。SB1は焼失しているが、垂木とみられる炭化材の出土層位が床面直上ではなく覆土中であることから、焼失したのは住居廃絶後、一定期間を経た時点とみられる。したがって、これらの土器の出土状況は、それらが火災の際やむなく見捨てられたのではなく、それ以前の住居廃絶の時点から、あえて使用時の状態のままで残し置かれた可能性を示唆する。⁽²⁾ こうした行為については、住居廃棄に伴う祭祀との関連を想定する見解もある。

最後に、SB1の時期を上記のように6世紀末～7世紀初めとすると、この時期の周辺遺跡との関係が注目される。すなわち、本遺跡周辺では、6世紀末から7世紀にかけて出雲文化の影響を示す横穴群が営まれ（峯双横穴群）、その構成集団のものとされる住居跡も見つかっている（峯双遺跡）。⁽⁴⁾ またSB1からは須恵器や鉄滓が出土しているが、近辺では須恵器や鉄の生産開始を示す遺跡も確認されている（峯双窯跡・中野谷窯跡、峯双製鉄遺跡）。こうした周辺遺跡との関係は、本遺跡の位置づけを考えていく上で一つの手がかりとなる。本遺跡から160mほど南に下った丘陵先端部に立地する川平第1号古墳は6世紀後半の築造とみられ、SB1より時期的にやや先行するが、両者は同一丘陵上に縦起的に営まれた古墳と集落として何らかの関係があったものと考えられる。

註

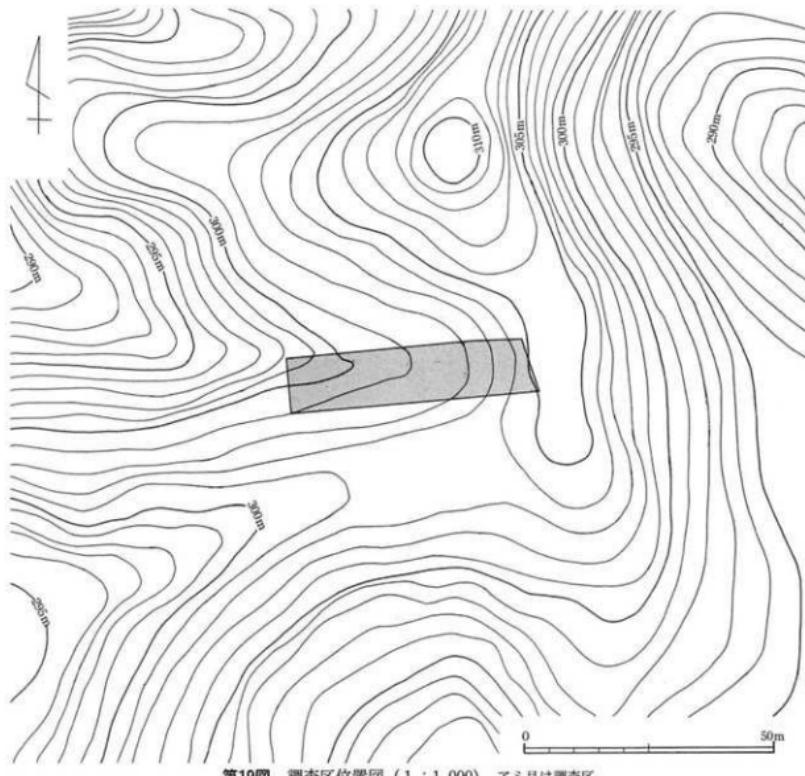
- (1) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年
- (2) 常定の峯双遺跡、向泉の空山遺跡なども同様の立地で、数軒からなる古墳時代の集落遺跡と考えられる。
- (3) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「浅谷山東B地点遺跡」 1992年
- (4) 広島県教育委員会「常定峯双遺跡群の発掘調査報告」「広島県文化財調査報告」第7集 1967年

VI 常定川平2号遺跡

1 立地と調査前の状況

常定川平2号遺跡は、北から南に延びる丘陵上に立地している（標高298～304m）。丘陵北側の高所には西から東へと貫入する小谷があり、遺跡はその最奥部の西向きの斜面上に存在する。西には南流する萩川にそって水田地帯が広がり、水田面とは約50～55mの標高差がある。

調査前の状況は山林であり、大きな削平や搅乱の痕跡はなかった。試掘調査で土坑2基が確認され、形状・配列・立地などから、縄文時代の動物捕獲用の陷阱と推定された。



第19図 調査区位置図 (1 : 1,000) アミ目は調査区

2 調査の概要

調査区は、西から東へ入り込む谷の奥に位置しており、東西方向に細長く、長さ47~50m、幅11mを測る。調査区の東と西では約6.5mの高低差を測る。

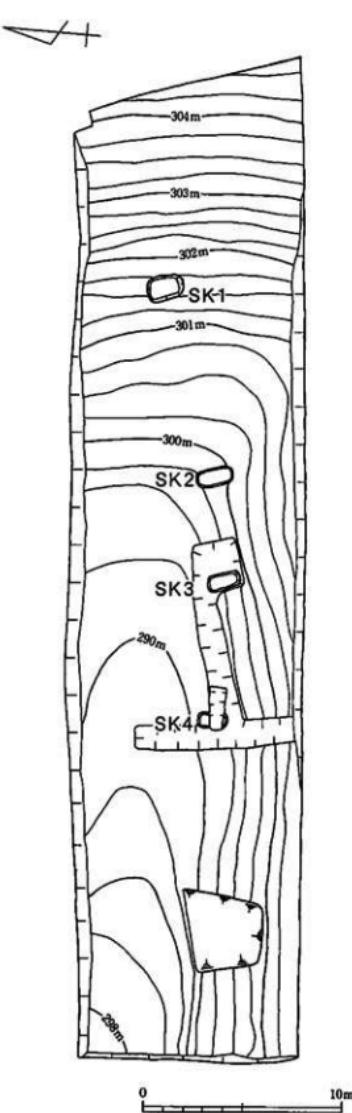
検出した遺構は、土坑4基（SK1~4）で東西方向に列状に並ぶ。土坑間の距離は、SK1-SK2間が約8.5m、SK2-SK3間が約4.5m、SK3-SK4間が約6mである。SK1は斜面上で、SK2~4は谷の底で確認した。平面形は、SK1のが隅丸長方形に近く、その他は長方形で、いずれも南北方向に長い形状をなす。

遺物は、SK1の下層から縄文土器と思われる細片が出土したが、これ以外には確認できなかった。

調査区内の土層は、上から順に、表土(腐葉土)、茶褐色土、黒色土(クロボク)、黒褐色土(クロボク)、暗黄褐色土である。これを最深部では約1.5m掘り下げたが、そこでの黒色土の深さは約1.1m、黒褐色土の深さは約0.3mであった。表土掘削は、暗黄褐色土の上面近くまで行い、遺構を平面で確認した。試掘トレンチの土層観察や試掘調査のデータから、断面では遺構(SK4)が黒褐色土の上面から掘り込まれていることを確認していたが、遺構の覆土は同質であり、平面での確認は困難であった。そのため、黒褐色土の次層である暗黄褐色土の上面近くまで慎重に掘り下げを行った。

3 遺構と遺物

検出した遺構は、土坑4基である（SK1~4）。遺物は、SK1の下層から縄文土器と思われる細片が出土した。ほかの土



第20図 遺構配置図 (1 : 250)

坑や調査区内から、遺物は出土していない。

(1) 土坑

S K 1 (第21図)

調査区の東側に位置し、谷尻から約10m東の斜面上に立地する（標高301.6m）。4基の土坑の中では最も高い場所に立地する。平面形はほぼ隅丸長方形をなし、主軸（長軸）は等高線に沿ってほぼ北西—南東方向を指す（N25° W）。規模は、長さ1.81m、幅1.29m、深さ1.17mである。壁面は、北壁がほぼ垂直に、その他の壁面はやや斜めに掘り込まれている。とくに傾斜の大きい（約70°）東壁は一部崩落している。底面はほぼ長方形で、中央がゆるやかにくぼんでいるが、小穴などは検出されなかった。覆土は主に黒色土と黒褐色土である。下層から縄文土器の細片が出土した。

S K 2 (第21図)

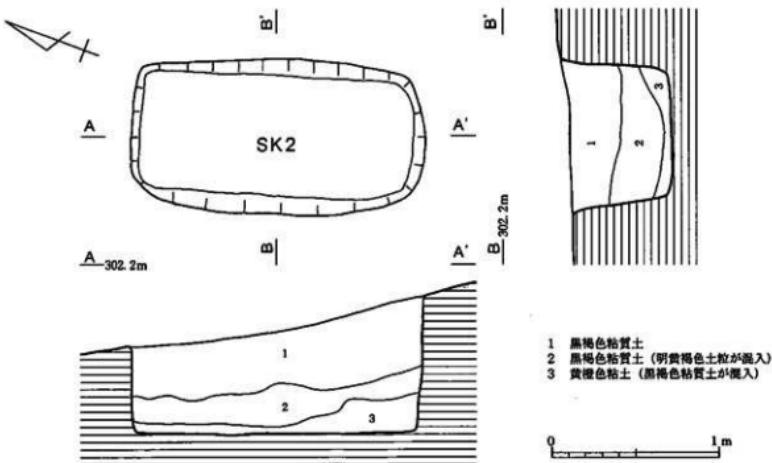
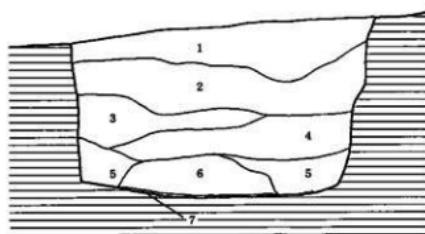
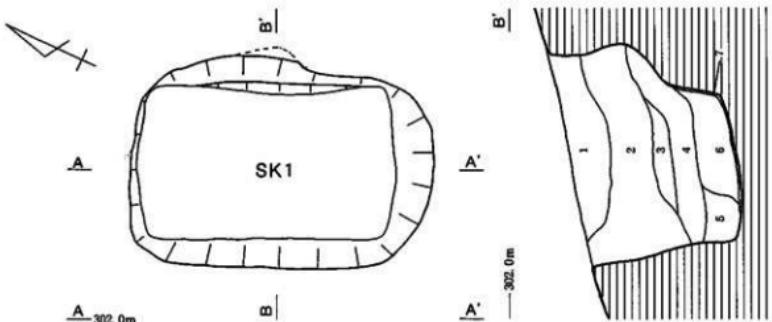
調査区の中央部やや東側に位置し、谷底から東南方向に斜面が立ち上がる場所に立地する（標高299.8m）。東側斜面の上方には約8.5m離れてSK1が、西側斜面のやや下方には約4.5m離れてSK3が立地する。平面形はほぼ長方形をなし、主軸（長軸）は等高線に直交しほぼ北西—南東方向を指す（N21° W）。規模は、長さ1.76m、幅0.92m、深さ0.86mである。壁面は、南北の壁面がほぼ垂直に、東西の壁面はやや斜めに掘り込まれている。底面は平坦で、小穴などは検出されなかった。覆土は主に上層と中層が黒褐色土であり、下層が黄橙色土である。遺物は出土していない。

S K 3 (第22図)

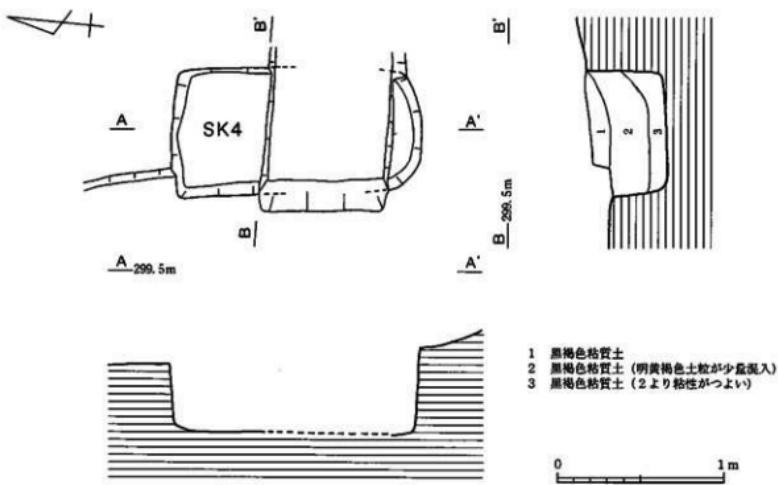
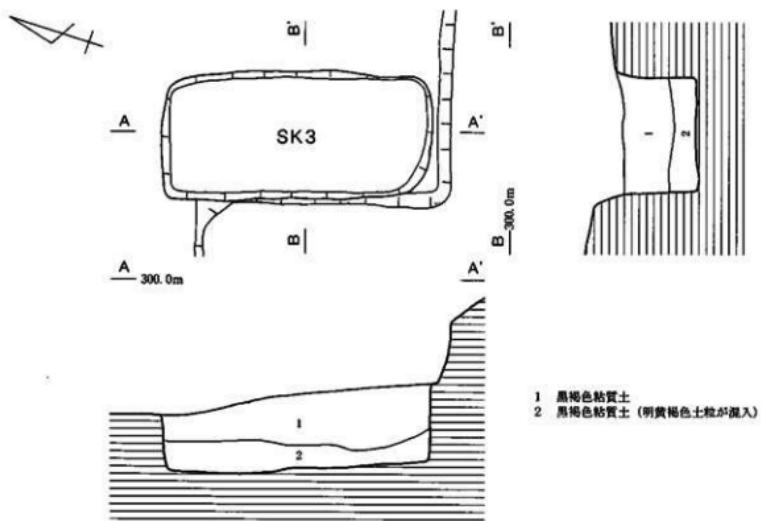
調査区の中央部に位置し、谷底から南方方向に斜面が立ち上がる場所に立地する（標高299.6m）。東側に約4.5m離れてSK2が、西側には約6m離れてSK4が立地する。平面形はほぼ長方形をなし、主軸（長軸）は等高線に直交し、ほぼ北西—南東方向を指す（N17° W）。規模は、長さ1.62m、幅0.77m、深さ0.58mである。壁面は、四面ともほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、小穴などは検出されなかった。覆土は主に黒褐色土であり、遺物は出土していない。

S K 4 (第22図)

調査区の中央部やや西側に位置し、4基の土坑の中では最も低い谷底に立地する（標高299.2m）。東には約6m離れてSK3が立地する。試掘トレンチによって土坑の南側は大半が失われているが、平面形はほぼ長方形をなし、主軸（長軸）は等高線に直交し、ほぼ南北方向をさす（N6° W）。規模は、長さ1.50m、幅0.76m、深さ0.56mである。壁面は、四面ともほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、小穴などは検出されなかった。覆土は主に黒褐色土であり、遺物は出土していない。



第21図 SK1・SK2実測図 (1 : 30)



第22図 SK3・SK4実測図 (1:30)

(2) 出土遺物 (第23図-1, 図版16-1)

SK 1 の覆土下層から縄文土器の細片が出土した。この細片は鉢の口縁部片と思われる。口縁部はやや外反して外上方に延び、口縁端部は外側を欠くが、端面は平坦でやや角張り気味におさめる。外面には、口縁部の端面から約2cm下方に、1cm間隔の二条の沈線が入る。その下方に、左下から右上へ延びる斜め方向の縄文がかすかに認められるが、この縄文は、二条の沈線によって上方部分が磨り消されているものとみられる。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に粗粒も少ない。



第23図 SK 1出土遺物実測図 (1 : 3)

4まとめ

常定川平2号遺跡は、口和町の南西部を南流する萩川を西に望む低丘陵上に立地する。丘陵北側の高所には西から東へと小谷が貫入しており、本遺跡は谷最奥部の西向きの斜面上にある（標高298～304m）。西側の水田面との標高差は約50～55mである。今回の調査で検出した構造は、土坑4基（SK 1～4）である。出土遺物は、SK 1 の覆土下層から縄文土器片1点が出土している程度で、その他の土坑からは出土していない。以下では、調査結果を整理し、その特徴についてふれておきたい。

SK 1～4の調査結果を整理すると、下表の通りである。これによれば、4基のうちSK 1は、形態・規模などの点で他の3基とはやや様相を異にしており、ひとまず両者を区別しておきたい。

遺構	平面形	現存規模 (m)		主軸方位	壁面	底面
		長さ	幅			
SK 1	隅丸長方形	1.81	× 1.29	1.17	北西—南東 (等高線に平行)	北壁がほぼ垂直 他はやや傾斜
SK 2	長方形	1.76	× 0.92	0.86	北西—南東 (等高線に直交)	ほぼ垂直
SK 3	長方形	1.62	× 0.77	0.58	北西—南東 (等高線に直交)	ほぼ垂直
SK 4	長方形	1.50	× 0.76	0.56	北—南 (等高線に直交)	ほぼ垂直

SK 1は、覆土下層から縄文土器の口縁部片が出土しており、縄文時代の土坑と考えられる。土器は器面に磨消縄文らしき手法が認められることから、土器形式としては中津式（縄文時代後期初頭）に該当すると考えられる。⁽¹⁾ SK 1の性格としては、丘陵斜面上に立地する縄文時代の陥穴（落とし穴）の可能性が考えられる。縄文時代の陥穴とされるものは、三次市の松ヶ迫A地点・⁽²⁾ 緑岩遺跡・油免遺跡などいずれも県北部の山間地域で発見されており、丘陵斜面上に数基の土坑が一定の規則性をもって列状に並ぶようなあり方を示す。それらは平面形が隅丸長方形で、土

坑底面にピットを伴う例が多く、形態上の共通性が認められるが、他にも円形土坑や、底面にピットを伴わない土坑で、陥穴と考えられる類例のあることが指摘されている。⁽⁴⁾ SK 1もまた、土坑底面にピットを伴わない陥穴である可能性は否定できないと思われる。近年、口和町の石谷2号遺跡で陥穴とみられる土坑が40基程度見つかるなど、県北地域では陥穴状土坑の事例が蓄積されつつある。⁽⁵⁾ SK 1については今後、こうした多くの事例との比較検討が必要である。

SK 2～4は規模・形態が比較的均質で、ほぼ同じ標高(299.2～299.8m)に平行に並ぶことから一群をなす可能性が高い。いずれも時期は不明であるが、SK 1とも主軸方位を同じくし、ほぼ平行に谷筋沿いに並ぶことから、SK 1も含め4基を一連の陥穴と考えるのが妥当であろう。

註

- (1) 第15回中四国縄文研究会『中津式の成立と展開』 2004年
- (2) 広島県教育委員会『緑岩古墳—三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査一』 1983年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰冢ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(IV)－油免遺跡の調査－』 2003年
- (4) 加藤光臣「中国山間地域の縄文時代の陥穴—広島県北部山間地域の事例を中心として—」(広島県立廿日市西高等学校『研究紀要 汗と夢』第3号) 1994年
- (5) 石谷2号遺跡については第1次調査が2009年に、第2次調査が2010年に行われ、陥穴と思われる土坑は第1次調査で4基と、第2次調査で38基みつかっている。

第2表 出土遺物観察表 () 内は現存値

遺跡番号	遺物種別	計測値(cm)	調査	色調	胎土	焼成	備考
川平第1号古墳	1 土師器 壁	頸部径: 8.4 肩部最大径: 10.6 器高: (6.6)	内面: 口頸部-ナデ 体部-ナデ 外面: 口頸部-ナデ 体部-ナデ 底部-ヘラ削り	内面: 淡橙褐色 外面: 淡橙褐色	4mmの大砂粒をわずかに含む 細砂を若干含む	普通	
	2 須恵器 杯蓋	復元口径: 13.8 器高: (2.3)	内外面: 回転ナデ	内外面: 淡青灰色	細砂を多く含む	良好	
	3 須恵器 杯蓋	口径: 15.4 器高: 3.4	内面: 天井部-ナデ その他-回転ナデ 外面: 天井部-回転ヘラ削り その他-回転ナデ	内外面: 青灰色	2~5mmの大砂粒を若干含む	良好	成形時の当て具の年輪痕跡あり
	4 須恵器 杯蓋	器高: (2.4)	内面: 回転ナデ 外表面: 天井部-回転ヘラ削り その他-回転ナデ	内面: 暗青灰色 外表面: 天井部-淡青色 その他-暗青灰色	細砂を多く含む	良好	外面上に窓変による斑痕あり
	5 須恵器 杯身	復元口径: 13.4 器高: (2.5)	内外面: 回転ナデ	内外面: 青灰色	細砂を多く含む	良好	
	6 須恵器 短瓶蓋	頸部径: 9.0 肩部最大径: 12.8 器高: 6.2	内面: 回転ナデ 外面: 底部-回転ヘラ削り その他-回転ナデ	内外面: 暗青灰色	細砂を多く含む	良好	外面上に窓変による斑痕あり
	1 土師器 壁	口径: 18.6 頸部径: 14.8 肩部最大径: 25.0 器高: 29.6	内面: 口頸部-ナデ 肩部-ナデ 外面: 口頸部-ナデ 肩部-ナデ、ヘラ削り	内外面: 淡黄褐色	細砂を多く含む	良好	外面上の頸部から肩部に煤が若干付着
	2 土師器 壁	口径: 16.0 頸部径: 13.6 器高: (7.8)	内面: 口頸部-ナデ 肩部-ヘラ削り 外面: 口頸部-ナデ 肩部-ナデ	内外面: 淡黄褐色~ 橙褐色	細砂を若干含む	良好	口頸部内面が一部熱変で赤味を帯びる
	3 土師器 壁	口径: 15.5 頸部径: 13.7 器高: 17.1 肩部最大径: 19.0	内面: 口頸部-ナデ 肩部-ヘラ削り、ナデ 外面: 口頸部-ナデ 肩部-ナデ、ヘラ削り	内外面: 淡黄褐色	細砂を多く含む	良好	外面上に肩部を中心として煤が広く付着
常定川平1号追跡	4 土師器 壁	口径: 28.0 頸部径: 24.0 器高: (12.7)	内面: 口頸部-ナデ 肩部-ナデ 外面: 口頸部-ナデ 肩部-ナデ	内外面: 淡黄褐色	細砂を若干含む	良好	外面上の一部が熱変で赤味を帯び、煤の付着あり
	5 土師器 壁	口径: 17.9 頸部径: 16.2 肩部最大径: 22.0 器高: 25.8	内面: 口頸部-ナデ その他-ナデ 外面: 口頸部-ナデ その他-ハケ目、ナデ	内外面: 淡黄褐色~ 橙褐色	細砂を若干含む	良好	外面上に煤が広く付着し、肩部が一部熱変で赤味を帯びる
	6 土師器 壁	口径: 14.8 頸部径: 13.9 肩部最大径: 19.1 器高: 22.4	内面: 口頸部-ナデ、指頸圧痕 その他-ヘラ削り、ナデ 外面: 口頸部-ナデ その他-ヘラ削り、ナデ	内外面: 淡黄褐色	細砂を多く含む	良好	外面上に煤が広く付着する
	7 土師器 壁	口径: 31.0 頸部径: 26.5 肩部最大径: 32.0 器高: (25.6)	内面: 口頸部-ナデ、指頸圧痕 その他-ナデ 外面: 口頸部-ナデ その他-ヘラ削り、ナデ	内外面: 淡黄褐色~ 橙褐色	細砂を多く含む	良好	外面上に一部煤が付着し、肩部を中心として熱変化でつよい赤味を帯びる
	8 土師器 壁	口径: 31.0 頸部径: 27.0 肩部最大径: 32.7 器高: 26.8	内面: 口頸部-ナデ その他-ヘラ削り、ナデ 外面: 口頸部-ナデ その他-ナデ	内外面: 淡黄褐色~ 橙褐色	細砂を多く含む	良好	外面上に肩部を中心として煤が濃く付着し、熱変で全般的に赤味を帯びる
	9 須恵器 杯蓋	復元口径: 13.2 器高: (4.4)	内面: 天井部-ナデ その他-回転ナデ 外面: 天井部-回転ヘラ削り その他-回転ナデ	内面: 橙褐色 外面: 淡灰褐色	細砂をわずかに含む	不良	

遺跡	遺物番号	種別 器種	計測値(cm)	調査	色調	胎土	焼成	備考
常定川平1号遺跡	10	須恵器 杯身	復元口径: 10.8 器高: (2.5)	内外面とも回転ナデ	内外面とも青灰色	細砂を若干含む	良好	
	11	須恵器 杯身	復元口径: 10.8 器高: (2.5)	内外面とも回転ナデ	内面: 灰白色 外面: 青灰色	細砂を若干含む	良好	
	12	須恵器 杯身	復元口径: 10.5 器高: (3.2)	内外面とも回転ナデ	内面: 青灰色 外面: 淡青灰色	細砂を多く含む	良好	
	13	須恵器 壺	口径: (11.0) 器高: (2.6)	内外面ともナデ	内外面とも淡青灰色	細砂を若干含む	良好	
	14	須恵器 鉢	口径: 12.2 器高: 7.6	内面: 底部ーナデ その他ー回転ナデ 外面: 底部ー回転ヘラ削り 回転ナデ その他ー回転ナデ	内外面とも青灰色	2~3mm 大の砂粒 をわずかに、細砂 を若干含む	良好	
	15	敲石	最大長: 17.1 最大幅: 6.3 最大厚: 5.3 重さ: 804g	—	淡青灰色	—	—	石材は角閃玢岩
常定川平2号遺跡	1	繩文 土器	長さ: 2.5 厚さ: 0.8	内面ーナデ 外面ー2条の沈線、磨消繩文	内外面とも暗褐色	細砂を多く含む	普通	



a 空中写真（南東から）
手前が川平第1号古墳



b 空中写真（北西から）
手前が常定川平2号遺跡



a 川平第1号古墳空中写真（東から）



b 同左（北から）



c 調査前全景（北から）



d 古墳周溝土層
(北東から)

a 古墳周溝土層
(東から)



b 同上 (南東から)



c 同上 (南から)





a 古墳周溝完掘
(北西から)



b 同上 (北から)



c 同上 (東から)



a 常定川平1号遺跡空中写真（北西から）



b 同左（南東から）



c 調査前全景（北から）



d SB 1 検出状況
(南西から)



a SB 1 土層（東から）



b 同上遺物出土状況
(北西から)



c 同上カマド付近
遺物出土状況
(北西から)

a SB 1 カマド付近
遺物出土状況
(北西から)



b 同上カマド検出状況
(北西から)



c 同上 (西から)





a SB 1 カマド断面
(南西から)



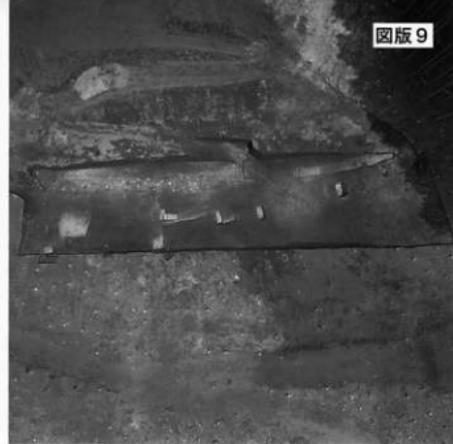
b SB 1 完掘
(北西から)



c SB 2 完掘 (東から)



a 常定川平2号遺跡空中写真（南東から）



b 同左（南から）



c 調査前全景
(南西から)



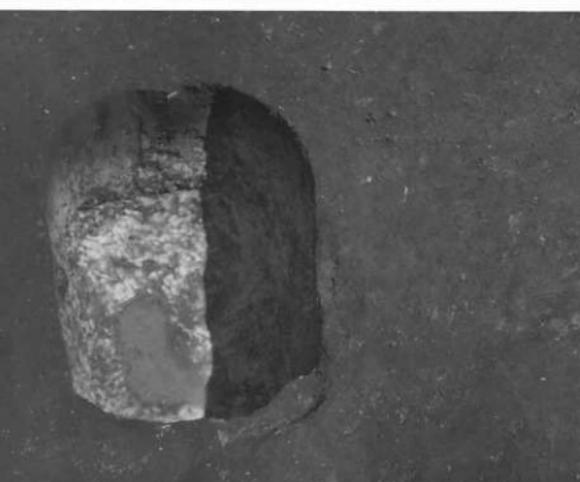
d 土坑群検出状況
(東から)



a SK 1 土層
(南東から)



b 同上完掘 (西から)



c 同上完掘 (南東から)

a SK2 土層
(北西から)



b 同上完掘 (東から)



c 同上完掘 (北西から)





a SK 3 土層（北から）



b 同上完掘（東から）



c 同上完掘（北から）

a SK 4 土層（南から）



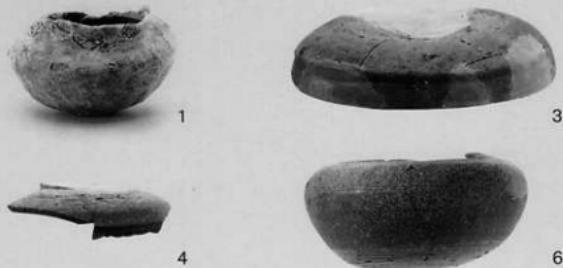
b 同上完掘（西から）



c 土坑群全景
(北西から)



川平第1号古墳



常定川平1号遺跡



出土遺物 1

常定川平1号遺跡



5



6



7

出土遺物2

常定川平1号遗迹



8



9



13



10



14



11



12



15

常定川平2号遗迹



1

出土遗物3

報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく 21
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）
副書名	川平第1号古墳 常定川平1号遺跡 常定川平2号遺跡
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	曾根 猛
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区鶴音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751
発行年月日	2012年3月5日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
川平 第1号 古墳	ひろしまけん 広島県 しょうばらし 庄原市 くわらわちやま 口和町 常定	34210	34603 -98	34° 53' 08"	132° 53' 51"	20080421 ~ 20080620	100	記録保存調査
常定 川平1号 遺跡	ひろしまけん 広島県 しょうばらし 庄原市 くわらわちやま 口和町 常定	34210	34603 -108	34° 53' 12"	132° 53' 49"	20080421 ~ 20080620	360	記録保存調査
常定 川平2号 遺跡	ひろしまけん 広島県 しょうばらし 庄原市 くわらわちやま 口和町 常定	34210	34603 -181	34° 53' 20"	132° 53' 44"	20080421 ~ 20080620	480	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川平第1号古墳	古墳	古墳時代	古墳の周溝1	土師器 須恵器	
常定川平1号遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡1 掘立柱建物跡1	土師器 須恵器 敲石 鉄滓	造付けカマド
常定川平2号遺跡	その他	縄文時代	土坑4	縄文土器	陥穴

川平第1号古墳	丘陵の先端部に立地する径約13mの円墳と推定され、周溝は幅1.1m、深さ0.6mである。周溝覆土下層から土師器の壺・須恵器の短頸壺・杯蓋片・杯身片が出土した。埋葬施設は、部材と思われる石が周溝覆土中層から出土したことや、墳頂部が平坦なことから、箱式石棺か石蓋土坑と思われる。本古墳の築造は、出土遺物から6世紀後半頃と考えられる。
常定川平1号遺跡	南から北に下る緩斜面で、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、柱穴状のピット11基を検出した。竪穴住居跡は東西6.3m、南北5.9mの4本柱の方形住居で、炉と造付けのカマドを伴う。焼失しており垂木とみられる炭化材が出土した。土師器の壺・甕や須恵器の壺・杯蓋片・杯身片、敲石、鉄滓が出土し、6世紀末～7世紀初めの住居跡と思われる。掘立柱建物跡は、桁行2間(4.6m)×梁行1間(3.2m)である。出土遺物がなく、時期不明である。
常定川平2号遺跡	東西に通る谷の最奥部の斜面上に、4基の土坑SK1～4が約4.5m～8.5mの間隔で列状に並ぶ。SK1は平面形が隅丸長方形で長さ約1.8m、幅約1.3m、深さ約1.2mで、SK2～4は平面形が長方形で長さ約1.5～1.8m、幅約0.7～0.9m、深さ約0.5～0.9mである。土坑の主軸はいずれも南北方向である。遺物は、SK1下層から縄文土器片が出土した以外は確認できなかった。SK1～4は出土遺物や立地条件などから縄文時代の陥穴と考えられる。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第44集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（21）

川平第1号古墳 常定川平1号遺跡 常定川平2号遺跡

発行日 平成24（2012）年3月5日

編 集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区龍音新町四丁目8番49号

T E L (082)295-5751 F A X (082)291-3951

発 行 財団法人 広島県教育事業団

印刷所 鯉城印刷 株式会社